
† 人形使いとゴーレムナイト † ~ 漆黒の守護者 ~

雛仲 まひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＋人形使いとゴレムナイト＋ 漆黒の守護者

【Nコード】

N1476G

【作者名】

雛仲 まひる

【あらすじ】

近年増える魔物による軍や騎士の損失による治安の悪化に嘆いていた王政府は、魔物対策に腕の立つ戦慣れた傭兵に目を付け正規のギルドに守護者ギルドを発足し治安の維持と対魔物、各種賊、無法傭兵ギルドの鎮圧に充てる事を決定した。クラウス公爵の計らいでシオンはアイナ達と離れ王都オースティンで新しく立ち上げるギルド（組合）の厳しい研修を受ける事になる。厳しい研修に耐え晴れてライセンスを得えたシオンは依頼をこなす忙しい毎日を送っていた。そんなある日、シオンに宛てられた依頼を一人で請ける事に

なる。その依頼内容は、ある人物の護衛だと聞いたシオン。依頼先で待っていたのは……。

く 漆黒の守護者 く 第一話

† G A T E - 1 ギルドの朝

爽やかな朝に柔らかい日差しが差し込む小窓の外には青空が広がる王都オースティンの街に一人の少年がいた。

少年の髪が日の光を浴びるとほのかに淡いブルーが浮かびあがる銀髪の少年は街にある三階建ての家の三階で目を覚ました。

「おはよ。シオン」

シオンの枕元で三十セル程の女の子が値を覚ました。背中には蝙蝠の様な翼を持ち、虎がらのビキニを身に着けている。

「おはよ——、リーシャ」

シオンは鬼妖精をそう呼んだ。

「名前なんていいよ……恥ずかしいから」

鬼妖精が娘がそう言つとシオンが言葉を返した。

「何時までも鬼妖精てのもなあ。名前て大事だと思うぞ。俺は」

シオンは本人も知らない記憶喪失の未来人。

何も知らず、この世界に来てアイナがくれた名前。

何者かも分からない自分を助けてくれ名前を一生懸命に考え探して貰った。

シオンにとって名前は、この世で唯一自分の存在を示すものだ。

「アービーの方がよかったか？」
シオンはふざけて笑った。

「私は、何千年と生きてるけど名前なんて初めてだよ。ありがとう。
シオン」

そう言うとりーシャが嬉しそうに喉を鳴らした。

「下に行くか。そろそろ仕事だ」

ギルドの建屋は一階が酒場になっていて二階の壁には大きなクエストボードが掛かっており、クエストボードには何やらたくさんの紙切れがピンで留められている。

「ふぁーおはようー。マスター」

シオンが眠そうな声であいさつをした。

「ああーら、シオンくん、おはよ。シオンくんも研修期間を終えて
今日からこのギルドの正式な守護者^{ガーディアン}ねえーが・ん・ば・ってねえ」
そう言ったのは、身体をくねらせ妙に内股のこの人物。

守護者ギルド、ローゼアールヴァル。ギルドマスター（G・M）
のモルドール（注：男）だ。

シオンはギルドの三階に住んで居る。

——ギルド。

グラジニアス大陸の国々に商人ギルド、職人ギルド（組合）は以前からあった。国同士の戦争が起これば、王宮直属の軍に領地を持

つ貴族が領地に持つ候軍が集められ王軍を編成する。

その他、傭兵等が金で兵士に雇われるのだが、傭兵は戦争が終わると職にあぶれ各種賊に戻ったり用心棒として各ギルドに雇われたりしていた。

傭兵ギルドも正式ではなく存在していたが、その多くは平時に職にあぶれた傭兵達が集まり好き放題にしているのが現状だった。

それはラナ・ラウル王国でも同じだったが、近年魔物等の活発化と数が増え各領地の被害も深刻なものになっていた。

正規の軍だけでは対抗しきれない状況にまでなっていた。軍を対応させ過ぎれば街の治安維持が疎かになり物取りや荒くれ者が増えどちらにしても国民の不満を募らせた。

また正規の洗練された騎士や兵士も人間より遙に強い魔物、蛮族等、他種族に損なわれ疲兵し過ぎれば隣国の脅威に曝される。同盟を結んだと言っても護られる保障は何処にもないのだ。

困った王は傭兵ギルドを改め守護者ギルドと名を変えこの度正式に起ち上がった新しいギルドそが、ガーディアンズギルドだ。

先立つてあった傭兵ギルドに話を持ち掛け正式なギルドとして数年前より試験的に実行していたのが、基礎が出来上がり正式に守護者ギルドとし発起する事となった。

守護者ギルドはライセンス制で国が発行し認めるもので守護者ギルドに所属する者はライセンスが必要になる。

研修期間もありその間の成績で初期のランクが決まる。ランクに

は、S G、S、A、B、C級の五つのランクに分けられそれぞれのランクに応じて請け負える依頼が決まる事になる。

各ランクにある規定回数か経験知を満たせば上がるが初期の成績で得られる最高はA級クラスまで、S G・S級は経験と功績のある者の証明。

メリットは王国は正規軍の消耗回避、傭兵の解雇による盗賊等に身を窺す者を少なくし治安を維持する事、他人種への正規軍派遣を少なくし代わりに各地に出来た守護者ギルドが迅速に対応する。

時折、依頼には正規軍を動かす事もあるが、それは長年の鍛錬と経験が必要な強い軍を育てる為だ。派兵が多いと国も領主も連隊で動く軍は多くの兵糧を必要とし経済的にも負担を強いられる。

守護者ギルドの発足で平時に兵士を温存できる上に兵糧も蓄えられる。

元傭兵ギルドの場合、国からの厚遇を受けられる事や依頼数の安定、ギルドランクにもよるが勅命で国からの依頼が入る依頼額は大きい。

依頼を出す側にとって国が依頼のランクを定める為、依頼料が分かり易くなり高額な請求をされ雇えなかったり、ばられる事がなくなり適正な額で安心で安く済む。

各地のギルドが依頼に対応するので魔物等による被害に対応が早くなり依頼は個人でも出来き依頼内容にもよるが国からの補助も出る。

守護者ギルドにはそれなりに厳しい規約、規則もあるが、S G クラスになれば騎士の称号と王宮直属の近衛隊、親衛隊への道も開け騎士の称号を賜れば爵位が付き国から年金が貰える様になるし新たにギルドの開設もできる権限を持つ事も出きる様になる。

国直轄の依頼は高額だが、依頼は請けた者が仲間と組み何人でこなしでも良いので何人で請けようが実際は定められた依頼料だけで済み、国としても多くの兵糧が必要となる討伐隊を組織して軍隊を動かすより安く済むのだ。

依頼は困難に成る程高額になる為、ランクが設けられていて依頼の失敗が続けば額も上がる。不正をする者も現れる事を防ぐ為魔法で創る魔法動物（デミ・ドラゴンの応用で鳥類が多い）に評価、定期報告、監視される事になる。

依頼を請けた者にその種類、数は知らされないが、最低でも三体以上付ける事が義務付けられている。

ガーディアンは請けた依頼が自分の手に余るものであると判断した場合、依頼を破棄する事もできる。

これはあくまで命令ではなく依頼であり履歴は残るが、自分の意思で破棄できる様になっている。

破棄した者が再度、同じ依頼を請けるには一年以上期間を空けなければ請ける事は出来ない。（例外を除く）

高ランクの者に低いクラスの者が、同行しても報告の評価で得られる付属ポイントも変わり自分の実力に沿わない依頼を請ければ死に繋がる事になる。

また監視、定期報告によっては依頼遂行中の報依頼内でランクが

引き上げられる事もあり依頼は子守りや農耕から盗賊、魔物等の討伐が主な依頼になる。

傭兵の中には市民権を持たない者も多い。ライセンスには依頼遂行に必要な特権も付きライセンスがそのまま市民権となる為、国側としても無法者が減り都合が良い。

他国との戦争、内乱が起これば本人の意思（騎士の称号を持つ者は除く）で正規軍としての参加も出来るし参加すればそれなりの報酬もあるが、魔物等から市民を守る為に拒否もできる等、個人の意思に委ねらる事が多い。

誰でもライセンスは得られるが、そう簡単でもない。増え過ぎるのも国にとっては脅威になり兼ないのだ。その辺のさじ加減は難しい所であった。

依頼は新しく設けられた。政府の機関（ガーディアンズ評議会）国や領主、各ギルドに持ち込まれる後先問わず全ての依頼を管理する。ライセンスを得るにはその機関で最低六ヶ月以上の講習を受け条件を満たした者はライセンスを得る事ができる。

研修では大抵職種別の専門に分かれるが、特進クラスもあり多くの者は研修期間の者はギルドに所属し雑務や守護者の助手をし生計を立てながら研修期間を受ける。

特進クラスは国からの奨学金もでるが、多くの者はギルドに所属はしてい研修を受ける事になる。

ギルドマスターは守護者ライセンスが必須で（S G級クラスの者に限られる）特別講習を受ける義務がありギルドライセンスを修得した後、各守護者ギルドはギルドマスターが定期的に会合を行なう

ギルドマスター協会に属する事になる。

全て上手く機能する訳ではないが、魔物等の被害が増える中で戦時の国民の守護と平時の今は経済的な効率はいい。

全てではないが、多くの傭兵ギルドは補助金が受けられる内に合併する等して守護ギルドに登録した。

登録はギルドライセンスを持たないギルドも出来るが規約、規則に沿なければならない。

請け負える依頼のランクは一部のB・Cクラスまでとなるが、正式に認可を受けたギルドはまだ少ない。

二階にあるギルドの扉が開く。

「ちいーす。おはようーただいま、マスター」

二十才位の一人の茶色の髪 of 青年が入って来た。

「あら、セイン、ご苦労様」

その青年が、シオンを見てモルドールに尋ねた。

「マスター？ そいつは新人さん？」

「セインは依頼で出てたから今日が初顔合わせねえー、今日からうちのギルドの正式な仲間になるシオンくんよお」

ごつい笑みを浮かべ、モルドールがシオンを紹介した。

「おはようございます。シオンです」

少し緊張の面持ちでシオンが挨拶をする。

「おうー！ 宜しくシオン、俺はセインだ」

そうしていると数名のメンバーが入って来た。

「おはよう。マスター」

「おはようございます」

「マスター、皆おはよ」

次いでギルドのメンバーでないだろう出で立ちの少女が入ってきた。

「きゃあー！ シオンおはよう」

金髪の少女がシオンに抱きつく。

学院の制服を着たティアナであった。

「シオンおめでとう。ガーディアン試験受かったんだってね」

ティアナが嬉しそうに言った。

「まあ、一応」

「一応なんて謙遜しちゃってえ！ 流石、私のシオンね。トップ合格だったんだってね」

ティアナはまるで自分の事のように喜んでいた。

いや、俺は君のものじゃないけどとシオンは思う。

「A級クラスなんて、凄い！」

ティアナが言うといささか周りがざわついた。

シオンは元々未来の世界で戦闘を主眼に置き特化させて「創られた」人間。

その眠れる幾多の戦闘経験と潜在的な能力は今だ完全には目覚めていないが、本格的な戦闘術もある研修期間の間にその片鱗を身体が思い出すのは早かった。

まだ常にこれまでの戦いで見せた動きは出来ないが普通の人間としてなら身体能力はすこぶる高い。

「ティアナ早く！ 学校いくよー遅刻しちゃう。きゃーシオンくん、今度デートしてね」

ティアナと一緒にいた女生徒がティアナを促した。

正式に守護者ギルドが発足してから、まだ間がないが既に少年、少女達の間で王宮近衛騎士隊と並ぶ、憧れの職業になっていた。

「ダメ、シオンは私のものよ。またね……」

ティアナがギルドを後にした。

ティアナ達が去った後、シオンにセインが尋ねる。

「シオン？ 初期A級ランクで、ほんと？」

セインは一瞬自分の耳を疑ったが、次いでシオンの言葉に驚く事になる。

To Be Continued

ゝ 漆黒の守護者 ゝ 第一話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

＼ 漆黒の守護者 ＼ 第二話

† G A T E - 2 洗礼

研修を終えた時点で初期最高のA級クラスのライセンスを取るには、余程の成績を残さなければ得られない。

試験運用時から協力してきた者達は簡易研修と過去の功績でランクが決定されたが、A級クラスは戦闘経験豊富な者でも余程の実力者でないと与えられないランクだ。

セインは試験運用当初から依頼をこなしA級クラスを得た。しかし、次のクラスを上げるのは容易な事ではない。

「シオンのアビリティはなんだ。ライセンス見せてくれ」
セインがシオンに声を掛けた。

ライセンスは王国の紋章が表に記された懐中時計、蓋の裏面には個人の情報、過去の依頼履歴と成績、アビリティ、クラス、所属ギルド等の情報が魔方陣に付与され記され残される。

SG級ならプラチナ製、S級は純金製、A級は純銀製、B級は青銅製、C級は単なる懐中時計と区別されている。

今はアイナが首に掛けているシオンのタグプレートにあたる物が懐中時計。

シオンが得ているA級クラスは純銀製の懐中時計には魔方陣、ゴイレムと剣を模したレリーフが記され人形使いと剣士である事を示している。

「ゴーレム剣士か。珍しいな」

——ゴーレムは魔法で創り出し操る魔法人形。

「そうなの？」

「ゴーレム創れる挺て事は、魔法も扱うのか？ 魔法剣士と言っても問題ないけどな」

——魔法剣士は剣を用い剣に魔法を乗せ戦う。

幸いな事にリーシャの生命力と融合したお陰？ で道具を必要としない四元素も使えるが、研修で四系統も理論も覚えた。

皆が、やいのやいのと囃し立てる中、何時から居たのか二十才前半の金髪の青年がシオンに冷めた口調で言った。

「ただの新人さ。場数踏んでない役立たずだ。精々、浮かれて死ぬな」

「止めるよ。レイグ！ シオンは同じギルドの仲間になるんだぞ。てかぁ。レイグ？ 何時帰って来たんだ」

「今し方だ」

「シオンの場数は並みじゃないよ。たぶんね」
リーシャがポツリと呟いた。

「妖精？ 精霊の使いと言われる妖精なんか連れてんのか？ 生意

「気だよ。お前」

「私は妖精じゃないもん」

リーシャが小さな頬を膨らませた。

ギルド内でシオンはリーシャを隠してない。

ローゼアールヴアルに所属する者には強い獣等を手懐け扱う者もいる。

皆、元傭兵だのが集まり何らかの訳ありの者も多く互いを詮索する者を殆どする者は居ないからだ。

「レイグは最年少で騎士の称号を賜った程の実力者だけだな！少しは仲間を認めたらどうだ」

セインが嗜めた。

——勲爵位は一代限りの爵位で騎士の称号は功績、実力の証明。

「認める？ 何も実績もない奴を？」

レイグは同じギルドの先輩。

シオンは、これから顔を合わす事になるので聞き流していた。

何だかんだいちゃもんを付けるレイグを取りあえず放って置いて初仕事を選んでいた。

「どれに、すつるかな」

ボードを見ながら呟いた。

何処のギルドでもそうだが依頼の多いのはB、Cランク。Aランクはまだ少なく張り出されても直ぐに誰かが請ける。

現在、立ち上がった守護者ギルド全体でもS級以上のガーディアンが少ない為、マスターの判断でA級の者で隊を組み依頼にあてるか、まだまだ正規の軍にも頼っていた。

「どうせやるなら報酬の良いのにしようよ」
リーシャが楽しそうに言った。

張り出された依頼を請けるのは基本的に早い者勝ちだ。

「お！ Aランクあった」

シオンが言うとかウンターの方から声が聞こえた。

「あつ！ それ俺が次ぎ狙ってたんだ」

青い髪の二十才位の青年が声を張り上げた。

「アイスマンそれ俺も目を着けてたんだあ」
セインも口を挟んだ。

「おい！ 俺が先に取ったんだ」
シオンが抗議の声を上げた。

「バカ、Aランクの依頼なんてそうないんだぞ。俺も混ぜろ」
セインが言った。

「三人で隊を組もう」
アイスマンが絡んだ。

Aランクの依頼額はBランクとは比べものにならない程、報酬もエクスペリエンスも高い。

「仕方ねえーな。そんじゃ三人で受けえ……」

シオンが言い掛けると横から手が伸び依頼書を抜き取られた。

「お前らA級クラスに成り立てとド新人がAランクの依頼なんて十年早い」

レイグは依頼書をぴらぴらとさせマスターの元に向うとした。

「レイグ、依頼横取りするきか！」

セインが怒りを露に言った。

「確かにレイグはローゼアールヴアルのエースだけど嫌がらせにしては品がない」

アイスマンが冷めた声で言う。

（新人いびりかなんかかよ。頭に来るな）

シオンの中に静かに怒りが生まれてくる。

「お前らAランクの依頼舐め過ぎてるんだよ。これもひよつこのお前らに対する先輩としての優しさだ」

レイグは三人に振り向きもせず言った。

「だったら最初からそう言えよ。陰湿な嫌がらせしやがつてえ」

シオンが怒りが噴火し強く言い放った。

レイグがシオンに向き直り眼を合わせた。

「なるほど良い目をしている。初期クラスA級だけの事はある」

「何が言いてんだ」

「その眼、喧嘩売っている？ のか」

レイグが薄い笑みを浮かべた。

「そう取るなら構わいやしませんよ……あんたが望むなら売ってやる」

「威勢がいいな。力を見てやる裏の修練場に来い」

レイグは奥にある裏に降りる階段に向い歩き出した。

「止めとけレイグは強い。下手したら怪我じゃ済まないぞ」
セインが慌てて止めに入る。

「同じギルドの者同士だし騎士の称号は伊達じゃない」
アイスマンも止めに入った。

シオンは無言で二人の静止を振り解きレイグの後に着いて行く。

周りに居た者はギルドのエースと大物ルーキーの一戦を楽しみにしながら二人の後を追って行った。

「マスターに報告する」

セインが言い。

「その方がいい」

アイスマンは頷いた。

クラウドの領地――。

時間を暫し遡る。

アイナとランスがシオンと離れて三ヶ月が過ぎた頃。

「はぁー」

深い溜め息を付く。

王都オースティンから北に馬車で三日程の場所にあるクラウド公爵の領地にある屋敷。

「あつ！ また溜め息吐いた」

ティアナがどうしてもシオンを自分の従者にするのだと言い張りシオンはオースティンに残る事となった。クラウド公爵は素性の分からないシオンを雇う事も出来ず、考えた末にオースティンでガーディアン研修を受けさせる事にした。

コカトリスを一人で倒した少年だ。自分が発起した守護者ギルドに強者が増えるのは悪くない。

ティアナは納得しなかったが、同じ街に居られる事になるのでそれで折れた。

公爵はオースティン城下街にある試験運用に協力をしてくれているローゼアールヴァルにシオンを預けたのだった。

そんな経緯でアイナ達と離れシオンは、オースティンに残りガーディアンライセンスを得る事になった。

急な話でアイナは戸惑い混乱したが、自分達の雇い主の決定に何も言ずにいるが、それは仕方がない事。

シオンとは半月程一緒に居ただけなのに離れてからアイナは心にぽっかり穴が開いた感じていた。

「シオン元気にしてるかな？」

しょんぼりしている姉にランスが声を掛けた。

「……………」

シオンの事を考えるといつも寂しくなってしまう。

「いつか、また会えるよ」

「……………」

「シオンはもうアイナ達の事忘れてるですかあ？」

アイナの目が遠くを見つめた。

「そんな事ないよ。シオン言ってたじゃない？ ガーディアンになつて会いに来るって研修頑張ってるかなあ」

「そうですね。シオンは、シオンはきっと、もう守護者になりますう」

アイナは励ましてくれているランスに笑みを見せた。

「まだ無理だよ。最短で六ヶ月は掛かるって公爵様が言ってた」

「逢いたいですう」

アイナの目から堪えていた涙が零れ頬に流れた。

「信じよう。僕等がシオンを信じなきゃね」

「そう、そうですね……逢いたいですう」

アイナはもう気付いている。シオンといると胸が高鳴り心が安らぐ理由に気付いていた。

——離れて初めて気付いた本当の気持ち。

「逢いたい……。シオンに逢いたいですう」
アイナは床にしゃがみ込んだ。

「はぁー、僕にまで溜め息、移ちやたよ」
やれやれと息を吐くと言った。

姉の願いを叶えたい。仕方ないなランスは思い心の中で何かの覚悟を決めた。

その頃、シオンは飛び級で研修カリキュラムをこなしていた。

ギルドマスターが居る部屋の扉が勢いよく開かれた。

「マスター」

慌てた様子でセインがモルドールを呼んだ。

「どうしたの？ 二人して慌てちゃって」

モルドールが漂々とした口調で尋ねる。

「シオンがレイグに喧嘩を売ったんですよ」

「喧嘩？ 男の子は元気ねえーほっほっほっ」

左手の甲を頬に当て笑って言った。

あんたも男だ！ と二人は思ったがそれより今はシオンだ。

「なに、呑気な事言ってるんですか」
アイスマンが言った。

「大丈夫よ。レイグもシオンくんを“殺し”はしないわよ」

「しかし、レイグはA級でも飛び抜けて強いですよ」

「そうねえ？ レイグの实力はもうS級ね。それと……、まあいいわ。放って置きなさい」

モルドールは何か言い掛けたが、特に気にした風もなく言った。

マスターからレイグがS級クラスと聞き二人の顔は蒼白になる。

「止めるぞ！」

セインが言うのと二人は裏の修練場に向った。同じクラスでも實力の差はあるが、S級の實力は別次元だ。

「用意は出来たか」
レイグが言った。

「敵は構えるの待ってくれないぜ」

「良い心構えだが……これは稽古だ、殺し合いじゃない」

「なら、そうさせて貰う」
シオンは剣を抜いた。

「遠慮はいらない全力で来い」

「いくぜ」

シオンがレイグに向かい切り込んだ。

（早い。流石にA級を与えられるだけの事はある。だが）
レイグは切っ先を見切りシオンの剣が空を切る。

そのまま回転を生かし裏剣を放つが、レイグは後ろに飛んで避けた。

紙一重の動きでシオンの攻撃を難なくかわす。

シオンが間合いを取り、口を開く。

（魔法が来るか？）

レイグが魔法が来ると読むが、シオンの口からは詠唱ではなく違う言葉が飛び出した。

「避けてるだけじゃ倒せねえぜ」

「いいだろう。俺も遠慮はしない。だが安心しろ手加減はしてやる」
レイグが言うとシオンに切り掛かった。

シオンもそれを紙一重でかわす。

（こいつ……できる）

「そんじゃ、こっちも行きますか」
シオンが短く呟いた。

「俺も久しぶりに楽しいよ」

レイグが不適な笑みを浮かべ、切り掛かり言葉を続けた。

「シオン魔法剣士だったってな？ 俺もだ」
レイグの動きが変わった。

「補助する移動の魔法を付与したのか？」

一瞬、遅れて気付いたシオンにかわす暇はなかった。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 ゝ 第二話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第三話

† G A T E - 3 決着

ギルドのエースとルーキー今を背負う者と未来を背負う者の戦いは強者揃いのローゼアールヴアルのガーディアン達も息を呑んで見守った。

決闘を止め様と修練場に駆けつけたセインとアイスマンは自分の目を疑った。

二人が駆けつけた時、レイグは大剣でシオンに切り掛かっていた。

その速さは電光石火。

同時に、キィー——ンと甲高い音が分厚い壁の中に響き渡った。

「新入り？ その剣、さぞかし高名な錬金鍛冶が鍛えたのだろっ。剣で大剣をまともに受ければ普通、折れるぞ。その剣を鍛えた者に感謝しろ」

「……折れねえさ。俺の親友が新しく送ってくれた剣だ折らせねえよ」

シオンは薄く笑った。

——折れた剣の代わりにくれたランスの形見の剣。

間を取り直しシオンとレイグは剣戟を残し切り結び互いに魔法も繰り出し始める。

野次馬の誰かが結界を張った。

「はあはあはあ……、もう終わりか？ 息上がってんぞ」
シオンがレイグを煽った。

「これからだろ？ 楽しい時間は違うか新入り」
レイグもそれに応えた。

（化け物がこいつ本気で強い。ヤバイ）

「レイグ？ あんた化け物か」
シオンは思った事を吐露した。

「レイグだシオン！ 魔力、剣術、体裁き、検圧を瞬時に流す技術、
こんな真似簡単に出来るもんじゃない、その歳で一体何処で学んだ
？」

レイグも本心を返した。

「知らねえよ。そんなの……俺には以前の記憶がねえ」
シオンは言葉を続ける。
「身体が勝手に動くんだ。何だかよく解らねえけどさ」

「次は切る」

「止めた方がいいんじゃないか？」
二人を取り巻いている野次馬の誰かが、場も空気を感じ、ぽつり
と言った。

二人の戦いに見入っていたセインとアイスマンが我に帰り叫んだ。

「皆！ 二人を止める！」

その声で野次馬達も我に帰る。

——危険過ぎる決闘。

レイグが動いた。

「二人共、止める——！」

セインが叫ぶがレイグは止まらない。

「風の理、大気の流れ偏在、満ちる者よ。刃と化し現と成せ」

レイグの大剣の周りに風の刃が纏わりつく。

「ウィンドブレイド」

シオンが剣を受け止める風の刃が刀身をすり抜ける。

レイグの口元が僅かに吊り上って笑みを浮かべていた。

（しまった）

シオンがそう思った瞬間。

袈裟切り状に、風の刃が身体に食い込んだ。

その風が、通り抜けた。数瞬後、自分の上げる血しぶきがシオンの目に映った。

レイグの風の新系統の魔法。

シオンに口元を読ませず詠唱し剣に乗せていた。

（急所は外した、死ぬ事はない。これで終わりだ）

レイグは思った。

「ま……だ……おわ……って……ない」
言い終わると風が刃となりレイグを襲った。

レイグはシオンの言葉に魔力を僅かに感じ取り魔法を放つ。

「「ウィンドブレイド」」
同時に繰り出された魔法は続け様に使った分レイグの魔法が押し負けた。

レイグの横を僅かに頬を撫で風が抜けた後、血が頬を伝った。

シオンは途切れる言葉の間に魔法の呪文を挟んだのだ。

シオンの目には、まだ鋭い眼光が宿っていた。

「取っておきまで出す事になるとはな……シオン！ お前とは全てを賭けて闘っても良いと思わせられる」

「隠し玉？ まだそんなのが、あんのかよ」

シオンにも隠し玉はある。

——精霊魔法。身体に宿るリーシャの力。

シオンは、アイナやランスと違い精霊と契約を交わしておらず、万全の状態でも精霊魔法は、未だ自分の意思で上手く使いこなせない。

——精神、身体に掛る負担。

（大き過ぎる）

研修で学んだ中に精霊魔法は人間で扱える者は極稀である事を知ってアイナとランス「すげえ」と思った位だ。ナタアーリアが人前で使つなと言つのも頷けた。

「俺は魔法剣士だが…正確には“魔剣士”と名乗るべき、かな？」
レイグが剣を構えた。

その時、モルドールの声が響き渡った。

「そこまでよ！」

その声を聞いた後、シオンは膝から崩れ落ち地面に伏した。

戦いを見ていた者達が、駆け寄り素早く治癒の魔法の詠唱に入る。

「レイグ、あれまで解放しようなんて、シオンくんを殺すつもり？」
モルドールはレイグに問うた。

「つい熱くなつて。こんな気持ちになつたのは、貴方とやり合った
時以来ですよ」

レイグの満足した口調だった。

「それでえ？ どうだったのシオンくん」

モルドールは何処か楽しげに言った。

「解つてらしたんでしょ？ マスター」

「レイグの感想を聞いているの。あ・た・しは」

「強いです。戦闘能力はね。魔力と魔法に関しては不安定で自分自身が魔法を行使する事に躊躇している様に思えますが、Aランクの依頼もこなすでしょう。しかし……」

レイグがその先を言おうとするがモルドールが遮った。

「分かってるわ。シオンくんは、まだ少年だもの本当の意味でもっと強くなって貰わないとね& a m p ; # 9 8 2 5 ; 守護者として、そして人としてね」

モルドールは嬉しそうに笑みを浮かべた。

シオンは自分の部屋で目を覚ました。

「大丈夫？ シオン」

ティアナの声だった。

どれ位気を失っていたのだろうかベッドの上に寝かされていた。

「びっくりしちゃったわよ。寮に戻る前にシオンの顔見てこうと思って寄ったら怪我して寝てるてモルちゃんに聞いて……初依頼で怪我したの？」

心配そうな顔をして顔を覗き込んでいる。

「いや、違っけど……」

シオンが言い難そうにしていたので原因までは聞かない事にした。
「酷い怪我したの？」

「分からないけど、直ぐにギルドの人が治癒の魔法掛けてくれた見たいだから」

シオンが肩に掛けて巻かれ包帯には血が滲んでいる。

「危険な依頼もあるだろうけど……気を付けてよね。何れ私をお嫁に貰うんだからね」

ティアナが顔を赤らめた。

「おい！ なに勝手に決めてんだ」

「いいの。私が決めたの」

少し剥れてティアナが言った。

「なんだよそれ……勝手な奴」

シオンが研修を受ける事になったのもティアナのわがままから始まったのだ。

「シオン少し眠ったら」

顔を赤らめたままティアナが言った。

「さっきまで寝てた」

「じゃあ、目を瞑りなさい」

「なに企んでんだ？」

シオンが不信を抱き尋ね。

「別に何も企んでないわよ！ 失礼ね……いいから目を閉じなさい」
ティアナが苛立った様子で言った。

「なんだよ。訳わかんねえ」

シオンは文句を付けたが目を閉じた。

「いって言うまで目を開いちゃダメよ！」

ティアナはそう言うとシオンの唇に自分の唇を重ねた。

シオンの唇に柔らかいものが触れると直ぐに離れた。

「なにしてんだ。いきなり」

「お、おまじない。怪我が早く治ります様につて」

ぷいと横を向き言々とティアナの目にモルドールの姿が映った。

周りには何時の間にかレイグ、セイン、アイスマンと後、数名のギルドのメンバーも居る。

「あら、お邪魔したかしら？」

モルドールが言った。

「へ、部屋に入る時はノックしなさいよ」

ティアナは顔を赤く染め怒鳴る。

「ドアくらい閉めてなさいよ」

モルドールは淡々と返した。

「シオンくん。包帯代えるわねえ」

モルドールがシオンに巻かれた包帯を取り傷口に当てられた綿を取ると目を疑った。

傷口は、もう殆ど消え掛けている。

切り口は綺麗だった治癒の魔法の使い手も素早く手当てした。

それでも治りの早さが尋常じゃない。

レイグの魔法に放った距離からして決して浅いものでもなかった。

「なんて回復力してんだ」

セインが目を丸くして声を上げた。

傷の具合を知らなかったティアナがモルドールに尋ねた。

「シオンの怪我酷かったの？」

「急所は外れてたけどレイグの魔法を受けてるのよ？ 酷くはな
くともこんなに早く治る傷じゃなかったわ」

モルドールは未だに信じられないという顔をした。

「きゃあ——！ 私のおまじない本当に効いちゃった！」

ティアナは感激し喜んでいる。

（はしゃぐティアナを見て幸せな顔してるな）

このお嬢さんとその場の全員が思った。

アイナは溜め息ばかり付いていた。

「はあ——」

シオンが居るオースティンの方角を、ぼんやり見ていた。

シオンと離れて半月が過ぎた早ければシオンはライセンスを取っ
ている頃だ。

「シオン逢いたいですう」

シオンに対する自分の気持ちに気付いてから余計に逢いたと思
いが募るばかりだった。

もし逢ってもシオンの気持ちは分からないし聞くのは怖いが側に

は居たい。

「またこんな所に居るの部屋に戻ろう？ 外は冷えるよ」
ランスが言った。

「ランスう——、シオンは、まだですかあ」
アイナが寂しそうに声を震わせた。

「シオンがライセンス取れたら連絡して貰える様に公爵様にしといたから」

シオンと離れてから元気の無い姉を見兼ねランスが頼んだのだ。

クラウド公爵もそのつもりで居た。忙しく留守にする事も多い公爵は屋敷に連絡が入る様に手はずをしてくれた。

それから二週間程が過ぎた朝に公爵が二人を呼んだ。待ちに待ったアイナ達にとっての吉報だった。

「シオン君が、先日正式にガーディアンになったそうだ」

「本当ですか？ やったあ」

ランスが喜びの声を上げた。

「最短、首席での合格だったそうだよ」

公爵もシオンがこんなに早くライセンスを取るとはそれも首席でとは思っていなかった。

アイナの顔が花を咲かせていた。

公爵もアイナの元気がない事を知って気に病んでいた。

「シオンは何時くるですかあ」

アイナが目を輝かせ問うた。

「それは分からんよ。ガーディアンになれば依頼も請けるだろうし彼も忙しくなる」

アイナの顔が俄に曇り出した。

それを見たランスが以前自分の中に決意していた事を口にした。

「公爵様……長らくお世話になった上、急で申し分けございませんがお暇を頂きたいと思います」

「ランス！ なにを言ってるですう」

アイナはランスの言葉に驚き戸惑った。

「まあ、待ちたまえ。ここを出てどうするといいいのかね？」

「オースティンに行こうと思ってます」

ランスが決意の籠った目をして答えた。

二人の母の住むログにも近い。何より元気のないアイナを見るのは辛かった。

「お前達は良く働いてくれる。寂しくもなるが仕方ない。好きにしなさい」

二人は複雑な思いだったが嬉しかった。

「ありがとうございます」

二人が深々と頭を下げた。

「ただし来月の終わりまではいて貰うぞ」

その夜アイナは遠く離れたオースティンの方角を遅くまで見ていた。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

ゝ 漆黒の守護者 ゝ 第三話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第四話

† G A T E - 4 奪う命、繋ぐ命

爽快に晴れの広がる下、広大な大地は新たな恵みの準備をしている。その空の下にシオンの姿があった。

「リーシャ？ 俺……ガーディアンだよな？」

爽快に晴れ渡る空を見上げシオンが呟いた

「そうだよ？ ガーディアンだお。しかもA級」
リーシャが答えた。

「さばんなー手抜くなー！ これも依頼だ、どんな依頼も全力でローゼアールヴアルのポリシーだ」

レイグが額の汗を拭った。

二人の出で立ち、麦藁帽子に首に手拭を巻いている。

守護者ギルドローゼアールヴアル所属のエースとスーパールーキーは剣の代わりに鍬を握っていた。

「なんで、俺まで……」

レイグが切なそうにぼやいた。

「元はレイグのせいだろ？ 違うか先輩」
シオンが皮肉一杯の言葉を投げた。

「どちらにしろお前の運命は変わらないんだよ！ うちのギルドはA級でも新人はCランクの依頼から始まるんだよ」

「言ってみましたぁー、そんな事をあのクネクネマスターめ！ 略してクネスターと呼ぶ」

二人の決闘後、モルドールがシオンに言った。

「良い事？ 盗賊団や人間に害を成す魔物等の討伐が守護者ギルドの主な仕事だけど、ただ戦うばかりじゃ何も変わらないのよん。何かを誰かを護る為、とはいえ戦いは破壊しか生まないわ。けど戦いの本質を知って戦うと知らずに戦うのでは自ずと本質が変わって来るものよ。シオンくんはとても強いけど、まだとても弱いわ。まずは自分自身の心の在処を学びなさい。とても難しい事だけどね」
モルドールが依頼書に目を通すしシオンを見た。

「当分のシオンくんの依頼は私の指示でこなして貰うわね」

「それとレイグ！ 貴方ね。今回少しはしゃぎ過ぎよ。罰として一週間酒場の手洗い場掃除と暫らくシオンくんの依頼サポート兼、お守りね」

全身をくねらせモルドールが言っていた。

「で！ 今回の依頼はこの広大な土地の野良仕事の手伝いなんだよ。シオンくん」

レイグが途方に暮れた顔で言った。

「研修に野良仕事なんてなかったぞ、先輩」
シオンがうな垂れた。

「馬鹿者。依頼の野良仕事なめんな！ 身体と精神を鍛えるのにいいんだよ！ ナチュラル筋肉がもりもりだ」

「なめてませんよ！ 俺の完敗ですよ」

「わたし……もりもり、岩盛り筋肉シオン……嫌かもお」
肩口のリーシャが口を尖らせ呟いた。

「冗談抜きで気は抜くな。いつ魔物に襲われるか分からないからな」
レイグは顔を引き締めた言葉を続けた溜め息交じりに……。

「この依頼の前は鉱山で鉱石の採掘とマダム・ヤーンさんのペット、
二十日鼠シャーロット・エリー・ホルスタインちゃんの搜索ね」

「せんぱーい。ローゼアールヴアルのポリシーは？」
シオンが気の抜けた声で聞く。

「いつも元気に笑顔で真心込めてどんな依頼も全力で」

「変わってませんか？ ギルドのポリシー」

「いいんだよ。マスターいつも違う事言ってるから」

ローゼアールヴアルのガーディアン達はCクラス依頼を受ける際に
メインの依頼場所の道中にある依頼を掛け持ちでこなす。

規定で各ランクに掛け持ち数の制限が設けられCなら三件、Bなら
二件、A以上は基本的に掛け持ちできない。無論緊急を要する時、
トラブルの発生は除くが監視中の魔法生物で評議会に報告する義務
がある。

「皆さん——！ お昼にしませんか——」
依頼主の娘が、シオンとレイグに声を掛けた。

歓談を交え昼食をシオン達は摂った。

「しかし、広いねー、向うの人達は何してんの？」
シオンが少し離れた場所を指指差した。

「麦の収穫をしてるんですよ」

広大な大地に黄金が敷き詰められた様にも見え、綺麗で美しい風景だ。

シオンはコカトリスと戦った時の草原を思い出し次いでアイナの事を思い出した。

咲き誇る美しい花達の息吹が失われた時、アイナが言った言葉「この子達の息吹はどこにいったですう」

「俺達が食べるパンの原材料の麦も今、食べている家畜の干し肉も全て命なんだよなあ？」

シオンは黄金色に輝く風景を見ながら呟いた。ポツリと呟いた。

「そうだな。俺達も自分達が生きる為に他の命を奪ってる事に違いはないな」

「俺達は、それらから見たら俺達が倒してる、人を襲う魔物等と変わらないのかな」

シオンはやるせない気持ちを言葉にした。

「それは、少し違いかも知れませんが」

「どういう意味？」

「確かに私達も命を奪ってるのかも知れませんが。でも全てを奪う訳ではありません」

娘は言葉が続けた。

「私達は自然の恵みを根こそぎ奪っている訳ではありません。この恵みの種子を残し次に繋げています」

そう言って娘は微笑んだ。

「勿論！ この恵みに感謝の気持ちを忘れてません」

「そうだな。欲するままに奪う事は、ただの略奪に過ぎんからな」
レイグが相槌を打った。

次に繋げる思いか……今は、まだ良く分からないけどそういう考え方もありだ。シオンはそう思った。

「さて！ 腹も膨れたし始めるか」
少し気分が晴れた様に思えたシオンが声を上げた。

「そうだな。終わらせてギルドに帰ったら飲むか」
レイグも腰を上げた。

今回の依頼を全てこなし翌日の夕方、二人は報酬を受け取る為、評議会に来ていた。

「先輩？ あれだけの労働でこれだけですかあ？」

シオンが不満そうに言った。

「先輩が何時も高い宿に泊まるから経費も赤字じゃないですか！」

報酬は監視報告の魔法生物が無事に戻り依頼の完了を確認後、支払われる。

その三割が国の運営で依頼を各ギルドに振り分けている評議会に、一割から三割がギルドに残りがガーディアンへの報酬となる。

依頼遂行に必要な経費は、あらかじめ依頼内容に見合う金額が定められているが、後払いになっていて依頼を途中で破棄したりすると支払われない。切り詰めれば黒字になるし贅沢すれば赤字になるのだ。

「うつさい。なんでお前は馬使ってた？ 俺のグリフォンなら昨日の夜に帰れたんだ」

レイグが半逆切れ状態でシオンに噛みついた。

「野宿でいいじゃないすつか」
シオンが文句を付ける。

「長い時間馬に乗ってたんだ。腰と尻が痛くて仕方なかったんだよ」

「初めからグリフォンに乗せて行ってくればいいじゃないすうか」

「お前に合わせて馬にしたんだ。何れ一人立ちするんだから地形と地理も実際に見て置いた方がいい。それにグリフォンは二人も乗せて長い時間は飛べない。タフな竜なら別だけどな」

「それより、ギルドに帰るぞ」

二人がローゼアルヴアルに戻るとモルドールが出迎えた。

「二人ともおー、お・つ・か・れ様ー」

「ただいま。マスター」

二人はモルドールに依頼の報告を終えたと下の酒場に向おうとした。

「シオンくんに次の依頼よ」
シオンに依頼書を渡した。

「今度は何処の鉱山で穴掘りですか？」

お守り役を請け持つレイグが嫌味交じりに尋ねた。

「今回の依頼はシオンくん個人に指名なのよ」

モルドールが腰をくねらせた。

「ちょ！ 待つてください。シオン一人では、まだ無理です。指名依頼なんて早過ぎます」

指名依頼の殆どは王国からの依頼が平議会からの勅命のSランク以上の依頼だ。Cランクなら個人的にも指名できるが、それ以上はギルド間に平等割り振られる（依頼の発生場所にも関係する。迅速に対応できる事を配慮する）のと癒着等の不正を防ぐ目的の為に平議会の審査が入るので少ない。

「それで依頼内容はなんです？」

レイグがモルドールに尋ねた。

「ある人物の護衛よ」

モルドールが漂々と答えた。

「Bランクの依頼じゃないですか」

「要人護衛ですか？ シオンはA級で問題ないですが……場合によつてはAランクにもなりますよ」

その頃、遠くのオースティンの方角を見ている少女がいた。

アイナは首からぶら下がるペンダントの様な物を握り締めていた。
それはシオンのタグプレートだ。シオンが別れ際に泣きじゃくる
アイナに手渡した物だった。

「待ちどうしい？」

ランスがアイナの肩を叩いた。

オースティンに行く事になってから毎日の様にアイナはこうして
いる。

「明日には、ここを出るんだから用意は整ってるの？」
ランスが尋ねた。

「そんなの一月前に終わってますう」

「はあはあっ！ アイナらしいね」

「ランスは、本当に行かないのですかあ？」
アイナが寂しそうに呟いた。

ランスは迷った末、お世話になっている公爵の下に残る事にした
のだ。

「うん、僕は残るよ。公爵様への御恩を返したいんだ」

アイナの目に涙が溢れた。二人はどんな時も一緒にいた。

「泣かないで離れても僕等は双子だよ。それはどんなに時間が過ぎ
ても変わる事はないよ」

「ですけどですけどー、アイナはやっぱランスと離れるのは嫌ですう」

「僕も寂しくなるけど、いつかは離れ時は来るんだ。でも逢えなくなる訳じゃないよ」

「ランスが心配ですう。アイナが面倒みてやらないとランスが何をしでかすか分からんですう」

「逆じゃないのかとランスは思ったが、シオンがアイナの側に居てくれるだろう。」

「僕は大丈夫だしそれに僕は心配してないよ。シオンがアイナの傍に居てくれるギルドに住む事になってるから安心だよ」

ランスは笑た。

ギルドの空き部屋か宿舎に住める様にとクラウド公爵がモルドールに頼んでくれたのだ。

ギルドにはガーディアンが常に居るだろう。

「オースティンまで送れないからそれだけが心配だけど、いざとなったら魔法使いだよ」

ランスが耳元で囁いた。

「分かったですう。ランスが困った時、アイナも必ず助けに来るですう」

「さあ！ 明日からの長旅に備えてもう眠りなよ」

ランスの言葉にアイナは小さく頷いた。

「今日の依頼は無事終了と！」

「シオンも大変だね。Bランク一つ請けてからって、あのクネクネ容赦ないね。Cランク依頼も一つちゃっかり、追加してあるね」
リーシャが笑った。

「そんだけじゃないぞ！ 依頼早くこなしたら期日に間に合う様な依頼を支所で請けるだと」
シオンが愚痴をこぼした。

「でも、シオンさばらないけどね」

「当たり前だ！ さばれたら直ぐにばれるだろ？ 監視報告の魔法生物がいるんだから」

「大変だね埽；シオンも……明日はいよいよ本命の依頼だが、どんな人物を護衛するの？」

「さあーな？ 依頼書には依頼行使日と屋敷の場所しか載ってない依頼主の事情もあるさ」

今夜シオンは依頼の屋敷に近い小さな旅籠町で休む事にした。

翌日の朝、空は気持ちよく晴れ渡っていた。

To Be Continued

ゝ 漆黒の守護者 〵 第四話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第五話

† G A T E - 5 待ち人

晴れ渡る青い空の下、街道を疾駆する馬に跨る黒いローブに身を纏った少年の姿があった。

ガーディアンがローブで姿を隠す事は少なくない。世に名声を馳せ有名になり厄介な事も増える。

身近な人物を人質に取られ重要な依頼に支障をきたしたり、親しい人物に害が及ぶ事を避ける為だ。

シオンは依頼の主の屋敷に向っていた。

暫らく駆けた所で大きな屋敷が目に見え込んだ。

「あの屋敷だ。でえけえ」

屋敷の大きさに目を丸くした。

周りの街並みが小さい分、その大きさは王都の宮殿より際立って大きく見える。

「依頼主も屋敷？　きっと由緒ある大貴族だね」

シオンの肩でリーシャが言った。

「マスター間違っただけ依頼書渡したんじゃないの？」

こんな屋敷の人物をシオンは知らない。

シオンを知っている人物でなければ新人ガーディアンに、こんな

屋敷の依頼主の要人護衛を任せる筈がない。
戸惑いながらシオンは馬を駆けさせた。

屋敷では涙ぐむ少女が玄関口に立っていた。

「長らく世話してやったですう。元気にしてや……がれ……ですう」
涙ぐみながらクラウス公爵に挨拶をした。

「世話になった。元気に暮らすんだよ」

公爵は我が娘を送り出す思い出で涙を隠し微笑んだ。

「元気でね。母様に会ったら元気にしてるから心配しない様に伝えて」

「ラ、ランスも元……ぎで……いずのですよ」

「ほら泣かないで、僕まで、涙がででぐるう」
堪えていた涙を零した。

「そろそろ、迎えが来る頃だ」

公爵が時計に目をやって呟いた。

「迎えですか？」

ランスが不思議そうに尋ねる。

「若い娘を三日間程の長旅に一人で出せるもんかね」
公爵は微笑みを浮かべるとそう言って笑った。

「護衛を依頼した。私が発起したギルドだよ？ 私が使わなくてどうするね」

「ありがとうございます」

二人は公爵に深々と頭を下げた。

公爵の目に馬に跨る黒いローブの人影が映った。

「来た様だ」

人見知りのアイナはランスの後ろに隠れて様子を窺う。

黒いローブの左の肩口に鮮やかな赤い薔薇と上下から持ち上げる二体の妖精の刺繍が施してある。

それはローゼアールヴアルのギルドシンボル。

その人物が馬から降りると依頼主に挨拶をする。

「この度の依頼を請け賜りますローゼアールヴアルの守護者です」

アイナとランスの声に聞き覚えがある。まさかと思が、アイナは確信があった。

ずっと逢いたくて仕方なかった人物の声。

——間違いない。

ローブの人物が頭に被って顔を隠していた外套を取ると日の光にほのかに淡いブルーが浮かぶ銀髪の髪が姿を現した。

シオンは依頼主の屋敷の大きさで、ただならぬ人物と思い、片膝をつき深く頭を垂れ一礼をしている。

その為、シオンはアイナとランスに気付いてなかった。

人目に付く時はリーシャは大抵ズタ袋の中に身を隠している。

ガーディアンは身を隠す代わりに自分のパーソナルシンボルを口ブの背中に刺繍を施しそれが代名詞となる。

シオンの背中には角を持つ変わった形のゴーレムが光沢のある黒い刺繍糸で縫い付けられている。

隠れていたアイナが飛び出しシオンに抱きついた。

「シオン！ 逢いたかったですう」

突然の出来事にシオンは驚いた。

「な、なんだ？ アイナなのか？」

シオンがアイナの声に気づいた。

「シオン久しぶりだね」

ランスが歓喜に満ちた声が溢れた。

「ランス久しぶりだな」

シオンの声も喜びで満ちている。

「依頼の主はクラウドス公爵ですね」

「如何にも依頼を出したのは私だが、護衛をして貰いたいのは彼女だよ」

公爵がアイナの方に視線を移した。

「どういう事ですか？」

シオンが尋ねた。

通常通り依頼を出せば人見知りの激しいアイナの護衛を請ける守護者は、本来なら領地内にあるギルドの人物が請ける事になる可能

性が高い。

シオンを指名したのはクラウドス公爵の配慮だった。
ナタアリーアから預かっているアイナを本人が一番信頼している人物に任せる事にしたのだ。

クラウドス自ら評議会に直接依頼を出し評議会も公爵の指名依頼を
良しと判断した様だ。

「彼女を王都の友人の下まで護衛して貰いたい」
公爵が改まった。

どういう事なんだと思うシオンだったが、依頼を速やかに遂行する以外の事を依頼主に聞く訳には居はいかない。

シオンの立場を理解し公爵が事情を説明してくれた。

「彼女はオースティンでモルドール氏の手伝いをする事になったのだよ」

「何時の間……そんな事になったんです？」
シオンが不思議そうな面持ちで尋ねた。

「モルドール氏とは古い友人だね。オースティンに寄つ時に信用のおける良い使用人を一人紹介してくれと頼まれていたのだよ」

本当はアイナの住む場所と仕事を公爵がモルドールに探して貰う様に通知したが、モルドールがギルド従業員として雇い入れる運びとなった。

今、宿舎は一杯だからと言ってギルドの三階に空き部屋があるから、そこに住めばいいと公爵に言ったのだ。

アイナをギルド一階の酒場で給仕に使うにしても、こいつに出来るのか人見知りだしと思うが、仕方ない依頼だしとシオンは思い直した。

「ランスは来ないのか？」

シオンがランスの耳元で小声で尋ねた。

「僕は残る事にした。姉を頼んだよ」

「任せとけ」

シオンは微笑みで応えた。

ログでの事もあり、どんな事からも姉を守ってくれる。シオンが任せると言えば疑わない。

「今より、お請けした依頼を遂行します」
シオンが改まり言うと言に跨った。

「頼んだよ」
二人の頼みにシオンは頷いた。

「ランス！ また逢いに来る。元気だな」

「僕も逢いに行くよ。シオンも元気だね」

アイナは、これまで世話になっていた公爵と軽く抱擁を交わした後、別れを惜しむ様にランスを抱きしめた。

シオンが手を差し延べると手を取ったアイナを馬上まで引き上げ自分の前に座らせ手綱を取り、ゆっくりとオースティンに向う街道

に馬を進ませた。

アイナは長年仕えていた、ランスが残る屋敷が見えなくなるまで見ていた。

「しゅっぱあつ——ですう」

アイナが元気な声で何かを振り払う様に高らかに声を上げた。

「相変わらず元気だなー、お前は」
シオンがそう言い笑った。

「おばか……シオン」
アイナは小さな声で呟いた。

「なんか言ったか？」

「なんでもないですう」

「早かったろ！ ライセンス得るの？」
シオンが自慢げに言った。

「遅いですう。なあーに、もたもたしてやがったですうかあ」
馬に横乗りでいるアイナは、ぷいと前を向いて頬を膨らませた。

「口悪いなー、最短んだ。最低六ヶ月は研修受けなきゃなんねえの」

「おばか！ 二ヶ月も遅いですう」
アイナがそう言つとシオンの胸に軽く寄り掛り言葉を続ける。
「もっと早く逢いにきやがれえーですう……、シオンは言いましたあ。ライセンス取ったら逢いに来るって」

アイナの目に涙が浮かんだ。

「そんな事言われても依頼もあつたし忙しかったんだ」

「ずう——と待ってたのに来なかったですう」

「ちゃんとこうして来ただろ？」

「おばか！ シオンは依頼で着てるのですう。きつと、依頼じゃないですか来てないですう」

確かにそうだが……。

「お前一度でも手紙で寄こしたか？」

今回の依頼主がクラウドスと知らず屋敷の場所も依頼書で見に来た。

「うう——、そ、それは……その忘れてたですう」

アイナは罰が悪そうに言った。

アイナはシオンに逢いたいと思う気持ちの余り手紙を出す事すら思い付かなかった。

「でもでもですよ。シオンは逢いたくなかったですかあ？」

アイナが話を摩り替えた。

「俺も逢いたかったさ」

「シオンに逢いたくて逢いたくて毎日泣いてたですう」

アイナは自分で何を言ってるのかも分からない。

「どうして泣くんだった？ 毎晩アービィにでもいじめられたのか？」

「ち、違いますう。寂しくて寂しくて仕方なかったですう」

「ランスも居るし侍女仲間もいるだろ？」

アイナがシオンの胸に飛び込み背中腕を回して言った。

「おばかぁ！ アイナがシオンの事大好きなのが分かりますかぁ！ あっ！」

シオンの気持ちを知りたい。

ゴーレムとの戦いの後、シオンと求めたでもなく求められたでもなく恋人の様なキスをした。

シオンも自分の事を悪くは思っていないと思う……それを確かめる事が怖かった。

何とか先にシオンから「好きだ」と言わせたかったのだが、つい鈍感なシオンの態度に苛々して先に言ってしまった。

「馬降りるぞ。少し休む」

まだ屋敷を出てから然程、時間は経ってない。

ここはシオンが昨夜泊った宿のある旅籠だ。

シオンは、そこで借りていた貸し馬を馬屋に返した。

アイナには、なぜシオンが馬を返したのか理解出来ない。

オースティンまでは普通に馬車で三日程掛る。

「いくぞ。こつちだ」

アイナの手を引き昨夜の宿に向った。

「何処へ？」

「宿だ」

「へえ？　ちよつとシオン？　まだお昼で……こ、こつちいう事は、ねえ？」

アイナは完全に混乱していた。

つい「シオンが大好き」と言ってしまったが、いきなりと言うのはどうかと思う。

それも昼間からてのは、ちよつとである。

「好き」と言われてなくともせめて、もっとシチュエーションを大切にしたい。

「シオン？　あのねえですう？　昼間から宿とはその、なんですう？」

「いいから着いて来い。直ぐ済むから」

——ああ！　アイナの純潔は今、奪われるですう。母様ごめんなさいですう……と思つてると……。

「昨夜、ここに泊つて余分な荷物を預けてある」

「はあ？　今なんと言ったですう」

アイナは真っ赤な顔のまま聞き直した。

「荷物あるから取りに行くんだ。それと昼食べたら夜まで歩くぞ」

「そ、そうですかあ」

ほっとすると共にあんな事やこんな事を考えてしまった自分が恥かしくなる。

アイナはシオンの顔をまともに見る事が出来ない。

シオンは内心ドキドキしていた。

アイナが抱きつき「シオンが大好き」ときたもんだ。

研修を頑張ったのも、強くなってアイナを護ってやりたいと思う気持ちが強かったからだ。

A級といえ新人のシオンは雑務と依頼で忙しく、その上シオンの依頼はモルドールが管理している。

アイナの事は頭の隅に行っていたが、元々アイナの事は気になっていたシオンだ。

しかし、今は依頼の最中でその護衛の対象である。

依頼中に私情を挟める訳がない。今直ぐにでも抱きしめたい衝動を押えるのに必死だった。

アイナは、馬鉄が大地を蹴る音で聞こえてなかったのかと思った。

もし聞こえていて宿に入る事になっていたら……、やっぱり昼間からは、ちよつと思ふ、アイナだった。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 〵 第五話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第六話

† G A T E - 6 相部屋

暖かな日差しが西に大きく傾き、大地が燃える様な赤に染められた街道を歩く二人の姿がある。

シオンとアイナは王都オースティンの守護者ギルドローゼアルヴアルに向う途中。

「うう！ シオンー、もう歩けんですう」

アイナが疲れ果て駄々をこね出した。

「少し前に治癒の魔法掛けてやったる」

「でも疲れたですう。なぜ馬を返したですう」

アイナは、そう言うのと剥れて座り込んでしまった。

魔法は万能ではない。

治癒魔法と言っても気休め程度だ。

傷や病気が完全に回復全て無く、ましてや死人が生き返る事等ない。

魔法が万能ならば医者も移動の場車も、この世に存在しない筈だ。

シオンは治癒系魔法は苦手だが、魔力をケチった訳ではなく、魔力をなただけ万一に備え温存して置きたいのだ。

「ほら、もう少し歩けば草原に出る。ゴーレム呼び出して乗せてやるから」

そう言つて駄々をこねるアイナに促した。

「いやあですう。足痛いですう——」

アイナは言葉に耳を貸さず更にこね出し始めた。

「仕方ねえな……子供かお前は」

シオンが背中に背負つた鞆から膝掛けになりそうな厚手の布を取り出しアイナに手渡した。

「それ持つてろ」

シオンは、アイナの隣にしゃがみ込むとアイナの肩口と膝裏に腕を回すと抱え上げた。

「なっ！ なにするですう」

アイナは突然抱え上げれ驚いた様子でシオンを見た。

「もう直ぐだから抱えて行く」

少し照れた様でシオンは視線を外しアイナをお姫様抱っこすると歩き出した。

恥ずかしいけど、嬉くもある。それにとても安心するアイナはシオンの腕の中で思った。

「お前少し重くなつたか？」

シオンが笑つた。

バシッ、と良い音が夕暮れの街道に響いた。

「し、失礼な！ レディに向つてなんて事言いやがるですかあ」
顔を赤くしたアイナが齒を剥き出して怒つた。

「お前！ 殴るこたあないだろ」

「お、降ろしやがれですう」

抱えられた腕の中でアイナが暴れ出す。

「脚痛いんだろ？ 暴れんな！ 本当に降ろすぞ」

「……」

シオンがそう言うといアイナが暴れる事を止めた。

アイナもシオンの腕の中は心地良く、本心はこのままで居たいのだ。

暫らく二人は言葉を交わさずに歩いた。

アイナが恥かしそうに指をもじもじさせシオンに尋ねた。

「そ、そんなに重いすう？」

「別に」

むすつとした声で短く答えた。

街道から外れ草原に出た頃にはすっかり暗くなり始めていた。

「暫らく、ここで休憩」

シオンが抱えていたアイナを降ろした。

「そんなに重いすかあ」

俯き小声でアイナは呟いた。

「違う！ 夜が更けるまで休憩するだけだ」
相当気にしてるなとシオンは思った。

「今夜は、ここで野宿すうか？」

アイナが不安そうに尋ねた。

外で？ 昼間からそんなんだけど夜だけ外で？ 星が綺麗でロマンチックですうけど……。

——ああ、ごめんなさい母様アイナは今日女の子から女性になるですう、お星様の下でアイナの純潔は奪われるですう……。

アイナが思っているとシオンの腕が細い肩を抱き寄せ、シオンの羽織っているローブに包まれ抱き寄せられた。

「冷えてきたな、寒いだろ？ 暖めてやる」

シオンが飛んでもな事を、さらりと言った。

「シ、シオン？ あのねですうね？ その……こうゆのアイナは初めての事ですうし……そ、外というのはですうねえ……野宿では身体とか洗えないですうし……」

「大丈夫だ。今日中にはギルドに戻るさ」

シオンが自信に満ちた顔を見せ、意気揚揚としている。

どうしよう。もう覚悟を決めるですう！ アイナはそう思いシオンに身を寄せた。

（アイナはシオンが大好きですう。シオンのものになれるならそれで良いですう）

シオンは身を寄せるアイナを優しく包み込みアイナを抱きしめ言った。

「そろそろ行くか」
シオンが何時かの文字の浮かび上がる不思議ブレスレットに手を持っていく。

シオンの髪が月明かりに照らされ淡いブルーの銀髪が僅かに揺れた。

（シオンやつぱりかっこいいですうと思い覚悟を決め言った）

「シ、シオン？ 優しくしてですう」

覚悟を決めアイナは静かに目を閉じた。

「ああ、なるべく痛く無い様にやる」

「シオン！ 準備してきたよ」

リーシャの声が突然アイナの耳に飛び込んだ。

「へえ？」

アイナはきょとんとして呆然としている。

「久しぶりだね」

「シオンのゴーレム。遺跡で二機見つけた。でも反応しただけだお」

「サンキューな」

「あれ？ シオン？ 優しく抱きしめてくれたですう……あれ？
初めての……」

何がどうしたのか分からないアイナだった。

あの時、シオンはアイナが寒くて身を寄せたのだと思い抱きしたのだ。

呆然としていたアイナの頭がなんとなく現状を理解し始める。

「いくぞ。ゴーレム呼び出して乗せてえ——」

シオンが全てを言い終わる前にアイナにボコられた。

「どうしたのアイナ？ 顔赤いよ。て！ オンなんで殴てんの？」
リーシャが笑った。

「し、知らんですう」

アイナの何処からかくる怒りが夜空に木霊した。

「シオン？ そろそろデミ・ドラゴン買うかそこら辺の幻獣を飼いならせば」

リーシャが羽をバタつかせ後ろに腕を組んで軽く、くの字前屈する姿勢でシオンの顔を覗き込んだ。

「あれ高いんだよ。それにAMRSの予備機見つけたし」

意外とケチなシオンだが、依頼の殆どがCランクでは仕方ない事だった。

「お前は小さいからそんなに飯代掛んねえけど」

「それも分かるよ。でもあれはゴーレムじゃないし異形の物なんだお？ まともに動かないし」

ボコられ倒れていたシオンが起き上がった。

「なんか、文句あのか！」

「ある！ 私は一応心配してるんだお？ 異形を扱う者の遭う危険

を懸念して」

「まあ、確かにA M R Sは整備も必要だし整備するにも施設ねえし、依頼増えたら移動に時間割け無くなるから、その内考るさ」

シオンはリーシャの言った事を考えた。

「確かに人目に付かない時にしかA M R Sは使えない」

「デミ・ドラゴンなら餌も要らない」

デミ・ドラゴンは自立した意思を持つが知能は低い。

人形みたいな物で食料は要らないが、デミ・ドラゴン程の大きさの魔法生物はそれなりに値段が張る。

竜騎士の殆どが、デミ・ドラゴンを使っているのは、現在種の竜は異種族の中でも最強で気難しく、手懐け上手く扱えるまでに時間も掛かる。

それに冒し捕獲する必要もあつた。

「だから、それなりの値段がするってえの」

「ギルドにソーサラー（魔法動物、人形等を作り出せる魔法使い）は居ないの？ 安く創って貰えばいいじゃん」

「居ると思うけど、詳しくは知れねえ」

「なら、聖獣でも捕獲しに行く？」

「そうだな？ 考えとく」

「そつしなよ。私も手伝うから」

「捕まえに行くつても依頼もあるし餌代も掛かるしどうするかな」
シオンは悩んでいが、アイナが目を輝かせて言った。

「アイナはペガサスがいいですう」

「お前が使う訳じゃねえだろ」

「だめですう！ 絶対！ ぜえ——たい、ペガサスがいいですう」

ペガサス、ユニコンも十分気難しい聖獣だ。

アイナが言うのは幼い頃に少女の抱く白馬の王子様の、ただの憧れからだ。

「なんでそんなに拘るんだ」

「それはですうねえ——真っ白なペガサスに乗ってシオンがアイナを迎えに来るですう」

アイナは爛々と目を輝かせた。

（迎えにも何も今、その真っ最中なのだ。ペガサスは居ないけど）
「そろそろいいだろ。AMRS誘導するぞ」

シオンはブレスレットを操作しAMRSに信号を送った。

「シオン記憶もどったのどう？」

「戻ってない……思い出とか全く」

「だって、ブレスレット、ちまちま弄れてるって事は記憶が戻ったんじゃない……」

「そうでもない。記憶にも色々あるみたいだ。来るぞ」

遠くの夜空に甲高い鳴き声が聞こえ始めた。あの時シオンが使っ

たゴーレムの鳴き声。

シオン達は闇夜に降り立ったAMRSに乗り込み午前を回る前に街外れの草原に着いてしまった。

「ギルドに帰るか。評議会への報告は入ってると思うけど監視の魔法生物が全部帰るのは早くて明日の朝だろうし」

ギルドは街外れにある。

まずギルドマスターのモルドールの方に先に報告を入れる事にした。ギルドの一階は酒場になっているので、まだモルドールは酒場に居るだろう。

「マスター！ クラウス公爵様より承った依頼完了しました」
シオンがモルドールに報告した。

「まあ！ 随分早いじゃないのシオンくん」

人見知りのアイナはシオンにしがみ付き後ろに隠れている。

「その娘さんがクラウス公爵の依頼の人物？ まあ！ 可愛い娘さんねえ」

モルドールは何時もの様の身体をくねらせアイナを見て言った。

くねくねと身体を動かすモルドールを見てアイナが毒霧を言い放った。

「な、なんですかあ、このクネクネは」

「おまつ！ 馬鹿！ お前の新しい雇い主で住む所を世話してくれ

る。このギルドのマスターだぞ」

シオンが慌てた様子でアイナに告げた。

「そうよ。宜しくねえ。それとシオンくん？ それだけじゃないでしょ！ 薔薇妖精の酒場ローゼアルヴアルの夜の妖精。ママのモルドールよ。最後まで紹介なさい」

モルドールが歪な笑みを浮かべて言った。

「貴女、お名前は？」

「アイナです」

シオンが人見知りのアイナの代わりに答えた。

「マスター、クラウス公爵から聞いてますが、アイナ部屋は何処です？」

「……アイナちゃんのお部屋？ ……大変！ 忘れてたわ……ごめんなさいね。昨日から一人ギルドに住む事になった新人さんがいるのよ。その子に部屋を使う様に言っちゃったわ」

モルドールが割れた顎に手を当て擦りながら困った様子をして二人に目をやった。

「マジですか？ マスター」

「そうねえ——、公爵との約束もあるし……そうだ！ 当分シオンくんの部屋と一緒に住みなさいな」

「ちょ！ ちょっとマスター、アイナは女ですよ！ こんなのも」

「シオン！ こんなのはなんですよ！ こんなのは！」

「見ればわかるわ。それがどうしたの？」

モルドールは何をそんなに驚いてるのという様だ。

「俺は男ですよ？」

シオンが言い、言葉を続ける。

「アイナは色々困る事もあるだろうし……」

シオンが困った顔をした。

「そうなの？ まあいいじゃない男も女も関係ないでしょ？」

（そりゃ！ あんたは中間中性みたいなもんだから）

アイナは困る事ってなんだろうと呑気に思ってた。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 ゝ 第六話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―） <

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第七話

† G A T E - 7 誤解

閑散とした街外れの夜空の下。ローゼアールヴアルの一室にシオンとアイナいるのだが、険悪な雰囲気が漂っていた。

「何をそんなに怒ってたんだ？」

シオンは困り果てた顔をしている。

「シオンが守護者になってからも逢いに来なかった理由を納得したですう」

何故か、アイナはとっても御立腹の御様子だ。

「ティアナの事だろ？」

「そうですう。シオンは、シオンは何時もティアナとイチヤイチヤしてたですうかあ」

アイナが頬を膨らませ拳を硬く握り震えていた。

「してねえ！ ティアナが勝手に部屋に入ってたんだ」

「どうですかですうー！ どうせアイナの“ちち”はシオンが喜ぶ程も無いですう」

「話が違う！ それに何時、俺がお前の胸に文句言つたよ！ ……言つたね？ ……確かフェリナスで」

「シオンも鍵くらい閉めやがれですう！ 本当に何もありません？」

「うんうん、何もない何もありません。マスターが言ってたろ？ ティアナは何時もアンロックの魔法で俺の留守に部屋に入るって」

喧嘩の原因だが、シオンには飛んだ災難だった。

——数時間前に遡る。

アイナはモルドールから聞いたシオンの部屋の扉を開け様とした。

アイナが来た時に用意しておいた部屋を、すっかり忘れていて昨日ギルドに入った新人に貸し与えたのだ。

夜も更け込んでいて宿を探すには遅く、王都の城下町にある手頃な宿は何処も満室状態。

モルドールが言う様に暫らくの間、アイナはシオンと相部屋で暮らす事になった。

シオンは依頼に出ると数日は帰らない事が多く、空き部屋と然程変わらない状態でもあった。

シオンがモルドールに今回受けた依頼を報告している間にアイナは先に部屋に行く事にしたのだが、そこに誤解の原因が居たのだ。

「シオンのお部屋は確かあ？ 突き当たりの左側と言ってたですう」

シオンが報告をしている間に荷物を置きに行く事にした。アイナはシオンの部屋を探していた。

廊下の天井には夜光石（暗い所で発光する秘石で蛍光灯位の明るさ暗くしたい時は暗幕を張る）が埋め込まれて蠟燭等の明かりとは比べ物にならない位に明るかった。

部屋の前まで来ると扉に“SIONの部屋”とかわいらしい文字で書かれた木札がぶら下がっている。

部屋の鍵を開けようとし鍵穴に差し込んで廻した。
カチツと鍵の音がし扉を開けるが開かない。

（あれ？）

もう一度、鍵を廻した。

再び、カチツと音がし扉を開けてみると今度は開いた。

「シオンの奴め！ 鍵も閉めずに無用心ですうねえ！ まったくアイナが居てやらんとですう」

廊下の光が、部屋に差し込み照らし出し薄暗い場所に目も慣れて来ると様子が、ぼんやりと分かる様になった。

部屋は割と綺麗にしてあったが、ベッドの付近には服が脱ぎ散らかっていた。

「しゃあねえ奴ですう」

ぼやいたが、何だかそんなシオンが可愛くも思えた。

部屋は角部屋で右の窓際にベッドが置いてあり月明かりが差し込んでいる。

ベッドを良く見ると毛布が盛り上がって誰かが寝ている。

部屋を間違えたのかと思い扉にぶら下がっていた木札をしてみるが『SIONの部屋』と書かれている。

アイナは再び扉を開け、入り口にある夜光石を覆う暗幕を開く紐を引いた。

部屋が明るくなり、ベッドには毛布を被った金髪の綺麗な女性と思われる髪が見えた。

顔は横向きになって見えなかった。

ここはSIONの部屋に間違いないのである。

脱ぎ散らかった服を良く見るとかわいらしいデザインの何処かの学院の制服だった。

アイナが扉の入り口で立ち竦んでいると急に明るくなって起きたのか眠そうな女性の声が聞こえた。

「ふあ——！ シオンおかえりい——」

聞き覚えのある声だった。

SIONが依頼報告を終え部屋に戻る階段を上り切ると入り口に立ったままのアイナの姿が目に入った。

「どうしたんだ？ 入口で突っ立って廊下は冷えるから早く中に入れ」

アイナは身じろぎもしなければ何も答えず呆然と立ち尽くしているだけだった。

「なんだ？ ここにはアービィは居ないぞ？」

シオンが、からかう様に笑った。

アイナはシオンの方に振り向き歩き出すと俯いたまま無言でシオンの脇を通り過ぎた。

アイナの瞳には涙が溜っていた。

シオンの側を通り過ぎた時、一筋の涙が零れ落ちる。

「おい！」

シオンが声を掛けたが、アイナは振り向きもせず階段を下りて行った。

（あいつどうしたんだ）

シオンは足元に置かれてる荷物を持ち部屋に入ろうとして驚いた。

「うわぁ！ お前俺の部屋で何してんだ」

ティアナは下着姿でシオンのベッドに眠そうな顔をしながら首元まで毛布を持ち上げ上体を起こして座っていた。

「んん？ シオンお帰りなさい」

ティアナが目ぼけ眼でシオンを見ていた。

「なんで……俺のベッドでお前が寝てんだ？ どうやって入った？」

シオンは確かに鍵を掛け依頼に出た筈だった。

「アンロックよ。シオンを待ってたら寝ちゃった。えへえ」

ティアナが舌を出してかわいく、はにかんだ。

（そういや……こいつ魔法使えたんだっただけ……）

「待つてたつて……何時戻るか分からないだろ？」

「だから毎日ここで待つてるんでしょ？」

ティアナがさも当たり前といった態度で答えた。

「あれ？ さつきアイナが居た様な……夢かしら？」

ティアナの言葉を聞いたシオンは、階段へ向かい走り出した。

夢中でアイナは外に駆け出していた。

溢れる涙は止まらない。

屋敷で働いている時から身分と立場を越え仲の良かった友達のティアナが、大好きで逢いたくて逢いたくて仕方なかったシオンの恋人だったんだ。

アイナはシオンと住む事になるのが、ちょっぴり嬉しかった。

でもシオンは違ったティアナがいるからシオンは同じ部屋に住むのを嫌がったんだ。

「私転々馬鹿ですう」

一人で舞い上がって依頼だとはいえ、シオンが迎えに来てくれた事が嬉しかった。

脚が痛いと駄々をこねる自分を抱っこしてくれ優しくロープの中で抱きしめて嬉しかった。

それは全部、自分が依頼の対象だったから……。

依頼だから迎えに来ただけで、依頼対象だったから優しくなったんだ。

それを自分は勝手に誤解しシオンに初めてを捧げても良いとまで思った。

「……馬鹿みたいです」

アイナは流れ落ちる涙を拭いもせず街中に向って走った。

「マスター！ アイナ来ませんでしたか？」

シオンが血相を変えてモルドールに尋ねた。

「下に降りて行っただけ……何かあったの？」

シオンの顔色を見たモルドールが尋ね返した。

「分からないですが……急に……」

シオンは気まずそうな顔をした。

直ぐ後を追ってきたティアナが言った。

「どうしたの？ 急に」

「貴女、また来てたの？ 勝手に人の部屋に入っては駄目って言うたじゃないの」

モルドールがティアナを見て何かに気付いた。

「なるほどね。それで出て行っちゃったのね」

「なに呑気な事、言ってるすか」

「そうね。王都の治安は悪くないけど、土地感の無い裏通りに入り込んだら大変ね」

モルドールの言葉を聞いたシオンは外に飛び出した。

シオンが外に出るとリーシャを呼んだ。

「リーシャ！ 空からアイナを探してくれ」

「ええ——！ 眠いから嫌だあ」

「頼む」

「もふう！ 仕方ないなあ」

「俺は街中を走って探す。見つけたら場所を知らせてくれ」

「シオン？ 私の居場所探知出来るよね？ 見つけたら上空から教えてあげる」

「出来る。頼んだぞ」

リーシャは空に上がり、シオンは街中の方角に走り出した。

治安が良いとはいえ大きな街は、それなりの闇の顔を持っている。シオンは焦った。

「無事でいるアイナ」

アイナは何時の間にか知らない街並みに飲み込まれていた。シヨックで飛び出して来てしまい何処をどうやって来たのかも分からない。

知らない場所に気付き、急に不安感に襲われアイナは無意識に「シオン」と呟いた。

きよろきよろ、おどおど歩いていると誰かとすれ違い様にぶつかった。

五人組の一人だった。

鍛え上げられた体つき、着衣から見て傭兵か、何処かのギルドの者だろうと思われた。

守護者ギルドか、それに準ずるギルドの者なら、まだ良い研修で法律に沿う様教育を受けているしライセンスを持たない見習いも守護者ギルドの規則が適応され、犯罪行為は資格の剥奪に繋がる。

傭兵ギルドとして残ったギルドは守護者ギルドに対し不満、対抗心や反発心を持つ者が殆どだった。

その様な者に守護者ギルドの事を聞こうものなら、ただでは済まない。

「おい！ 嬢ちゃん痛いじゃねえか」

アイナは怯えながら男達に尋ねた。

「あ、あのですね。ローゼアールヴアルの場所を知りませんかあ？」

「ああ、そのギルドなら良く知ってるぜ」

「嬢ちゃんは、そのギルドの者かい？」

別の男が言った。

「はいですう」

アイナが小さく頷いた。

アイナにほんの少し安堵が戻った。

ギルドはアイナにとってこの街で、唯一知っている者がいる場所。ギルドを知っている人に会った安堵感だったが、次の言葉でアイナは蒼白になる。

「ローゼアールヴアルは良く知ってる、俺達は傭兵ギルド、タイタイン・ノーズの者だ」

「嬢ちゃんが、そのギルドの関係者なら敵だ」

男は粗悪で不適な笑みを浮かべて言った。

「リーシャ見つけたか？」

「無理！ 建物が多くて邪魔で見えないよお」

「見つけたら直ぐに伝える」

「リーシャは裏道りを集中して頼む」

人見知りの激しいあいつなら人の少ない場所に入り込む可能性もある。

人は無意識に苦手な物、危険な事を避け様とする。

土地感の無いアイナが、人気少ない裏通りの危険性を知らずに入る可能性は高い。

逆に安心感を求め人気の多い通りに居るとしても傭兵ギルドの奴らが、うろつろつしていてトラブルが起これば裏通りに連れ込まれる。

身体が小さく小回りの利くリーシャに裏通りを探して貰う方が、道に迷っても空に戻る。

「無事にいてくれ」

シオンが呟くと裏通りに入る津路にアイナの姿を見つけた。

「シオン！見つけた」

耳からではなく頭の中にリーシャの声が届いた。

「こつちも見つけた。だが、距離が遠い。位置を知らせる上から見失わない様に追ってくれ」

「分かった」

アイナは、きよろきよろしながら裏通りに入る津路にいたが、五人程に囲まれ恐怖で振るえる事しか出来ないでいた。

いざとなれば魔法を使う。けど……この距離では傭兵の武器が、詠唱が終わるより早く届く。

そんな思いが更に恐怖と混乱を生んだ。

「一緒に来て貰う」

男がそう言うアイナに掴み掛かろうとした。

「シオン——！」

アイナは、無意識にシオンの名を呼んだ。

手を掴もうとした男の手がアイナに届く事はなかった。
シオンが間一髪、駆けつけその手を掴み遮った。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 〵 第七話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―） <

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第八話

† G A T E - 8 ガーディアンズ

シオンはアイナの前に立ち傭兵らしき男の手を掴んでいる。

シオンの目にアイナに襲い掛かる男達の光景が映た時、シオンの中にある「眠れるちから」を無意識に引き出していた。

一瞬の内に男とアイナの間に、滑り込みアイナに伸びる男の手を掴んだ。

突然、目の前に現れた少年に殺気じみた冷たい気配を感じ男達は一瞬たじろいだ。

しかし、相手は良く見ると丸腰の少年だ。

だが、その眼光は歴戦の戦士が持つ異彩を放っている。

傭兵ギルドの者は大小構わず、数多く戦に参戦し戦闘に慣れている、正規軍の新兵より経験も技術も格段に上回る者は多い。

相手の目を見れば大体の力量は計り知れるが、少年の目に宿る殺気は、傭兵達を圧倒していた。

「何者だ」

男がシオンに問うた。

「ただの通り緹りの者だ」

守護者ギルドに属する者が、依頼を請けずに争うのは、余り宜しくない。

しかも街中で喧嘩は不味い。

しかし、相手は傭兵ギルドに所属する傭兵。

少年一人に大人五人が尻尾を巻いて逃げる訳はない。

その事を悟ったのか、シオンが口を開いた。

「アイナ下がってろ」

ライセンスには依頼遂行中、必要な時に一部の警察権を行使できる権限がある。

盗賊の討伐時の身柄確保等だ。

しかし、これは依頼ではない。

この場合、人助けという事で事後承諾でも認められるかも知れないが、アイナは同じギルドの関係者だ。

シオンが『ただの通り緋りの者だ』と言ったのには理由があった。

少年とは言え、これ程の殺気を放つ者。

何処かの傭兵ギルドか、守護者ギルドに所属してるのだろう、と当りをつけた男が再び問う。

「何者だ？ 何処のギルドに所属してるな？」

「俺は、ただの——」

シオンの言葉をアイナが遮った。

「ローゼアールヴアルのガーディアンですう——！ しかもA級ですう」

アイナが誇らしげに答えた。

(この馬鹿)

シオンは心の中で呟いた。

それを聞いた傭兵ギルドの男が言った。

「ほお！ 守護者ギルドの者か？ 嬢ちゃんも確かローゼアールヴアルの関係者だと言ってたな」

「知らねえよ」

事情を知らないアイナはシオンの態度に深く心を痛めた。

「そんなにアイナが邪魔ですかあ……」

アイナが悲しげに呟いた。

「嬢ちゃんは、お前を知ってるみたいだ。守護者ギルドの者が、依頼以外で身内の揉め事に口を挟む。俺達は傭兵ギルドタイタン・ノーズの傭兵だ。これはギルド同士の争いになる」

男が不適な笑みを浮かべた。

「それがどうした」

「お前個人の喧嘩ならライセンスの剥奪で済んだのに、守護者ギルドは特別依頼以外でギルド同士の抗争を禁止する規則がある。下手をすれば所属ギルドもライセンスを剥奪されるんだよな？」

「そんなあ」

アイナはシオンが取った態度の意味を理解した。

依頼は評議会から平等に割り振られる、それには余計なギルド同士の潰し合いを防ぐ事を避ける為でもある。

ギルドランクが上がれば、そのギルドの依頼は増える。

『競う』事と『争う』事は違うからだ。

「はあ！ 分かったよ」

シオンが大きく溜め息を吐いた。

男の手を離すと男の拳がシオンの腹部に入った。

「かはあ……」

シオンが呻き声を漏らす。

「痛えー、俺を好きにしてもいいが、あいつに手えー出したらライセンスなんか要らねえ。俺がお前らを潰す」

シオンは男達を睨んだ。

「そんな事知るか！ だが、お前が最後まで倒れなければ約束してもいい」

そんな約束等、あてにならない事位、子供にも分かる事だ。

しかし、ギルドの仲間に迷惑を掛ける訳にはいかない。

「運が悪いな嬢ちゃんが、同じギルドでなけりや警察権も使えただろう？ ただの知り合いなら正当防衛も主張できたのにな。規則、規約に縛られる、不敏なもんだな」

シオンは無言で堪える。

尋常じゃない程の傷の回復力を持っていても、秘めた力を発揮しても感じる痛みは、普通の人間となんら変わらない。

「そろそろ、倒れて楽になつたらどうだ」

ぼろぼろになつても倒れないシオンを見てアイナは堪らず周りの人に助けを求めたが、誰一人応じてはくれない。

無法者集団の傭兵ギルドに関わりたくないのだ。

これ以上シオンが、傷ついていく様が耐えられない。

アイナは母に止められている魔法を使う決意を固めた時。

「あら！ シオンくん苦戦してるわね」

アイナの後ろからモルドールの声がした。

「俺達は規則、規約そんなものに縛られない。自由だ！」

傭兵の一人が叫んだ。

「それはちよつと違うんじゃないかしら？」

シオンに殴り掛かろうとする男の手を掴んだモルドールが、何時もの声色とは違う野太い声で言葉を続けた。

「守るものがあつての自由だ、勘違いするな！ 何も無い処に自由なんて無いんだよ」

モルドールに気付いた男が言った。

「ローゼアールヴアルギルドマスター。魔人の大鎌」

「一人増えた所で前も手を出せない。何も代わらないんだよ」

モルドールが何時もの声で言う。

「そねえ！ このままじゃねえ」

「マスター！ この娘の名前は？」

セインの声がする。

傭兵の一人がセインを見て言った。

「超震。ブレードガンナー」

「可愛い娘ですね」

アイスマンの声がする。

「氷嵐……の魔弓使い」

「それだけじゃないよ」

アイスマンが笑みを浮かべた。

「氷の魔法が得意だったな。通り名、通りに」

アイスマンの笑みが冷たい笑みに変えた。

「勘違いするなよ。理論魔法は全て得意。氷の魔法は好みで良く使うだけだ」

「マスター！ この娘の名前」

セインが再び尋ねた。

「アイナちゃんよ。ウチのギルドで働いて貰うの、従業員としてねえ！ 皆、かわいがってあげてね」

「へえーアイナちゃんか、かわいいねえ、彼氏いる？」

人見知りのアイナは答えない。

ただ何が、何だか分からない。

「何だか……シオン、ぼろぼろじゃないか？」

レイグの声が聞こえた。

「あら、レイグまで来てくれたの？ 何時も揉め事には来ないのに」

何時の間にか、傭兵達の周りには他のローゼアルヴアルの仲間達も集まっていた。

モルドールが手隙の者を呼んでアイナの搜索に当てていたのだ。

「レイグ監視の魔法生物はついて来てる？」

モルドールが尋ねた。

「少し前に帰ったばかりですからいますよ」

「呼んで頂戴」

レイグが監視の魔法生物を呼び、羊皮紙を取り出してモルドールに渡した。

モルドールが何やら書き込むとセインに渡す。

「炎帝」

この状況に傭兵達は強気の状態を崩すどころか咆哮する様に高らかに笑い声を上げて言った。

「何人でも同じ事。お前達は手を出せない！ 違うか？」

「分からない人達ねえ、今は変わらないけど変わるのよ」
モルドールが笑った。

セインがモルドールに渡された羊皮紙をアイナの前で開いた。

「アイナちゃん字は書ける？」

「か、書けるですう。馬鹿にすんなですう！」

「ごめんごめん。じゃ、ここにサインして」

アイナが名前を書き終わるとセインがアイナに言った。

「あと、ぼいん押しい——」
言い掛けた所にアイナの拳が顔面を捉えた。

「な、なにをいきなり口走りやがるですう。これはシオンだけのものですう」

アイナは胸を隠して顔を赤らめた。

「ち、違うつて拇印。指で押す印鑑の代わりのボインね」
セインが鼻を押えながら言った。

拇印の押された羊皮紙をモルドールに渡すと魔法生物に括りつけ飛ばした。

「はい！ 依頼契約成立ね」

モルドールが言々と集まったガーディアン達が口ぶちに言う。

「依頼は何人で組んでもいいんですよねえ？」

傭兵達の顔色が一気に蒼白になる。

それを見たモルドールが言った。

「そうだけど、この依頼はシオンくんが、請けた様にしたからシオンくん次第よ。どうするの？」

「一人でいいですよ」

集まった皆ながら笑い交じり野次交じりの声が飛ぶ。

「んだよ。独り占めか？」

「わたしもあばれた——い」

「大丈夫かシオン？ ぼろぼろじゃねえか。何時でも変わるぜ」

傭兵達は自分達を馬鹿にしているのかと言わんばかりに怒鳴った。
「ガキ！ 拾った運を捨てるのか？ なめやがって死ぬぞ。お前」

「逆よ。今まで運が良かったのは貴方達。シオンくん殺しちゃ駄目よ」

「分かってますよ」

「ブンブン飛び回りやがって耳障りなんだよ！ 蚊（アールヴァル妖精たち）どもがあ！」

傭兵がシオンを囲み襲い掛かった。

シオンは難なく傭兵の攻撃をかわす。

丸腰のシオンは、ただでかわしはしない。

剣、槍、ハルバートを振るい五人が一度に囲うと襲い掛かって来たがそれが命取りになる。

シオンの中にある「幾多の戦闘経験」が無意識の中に身体にその動きをさせる。

一番最初に届く攻撃は槍の矛先だった。

（右から来る。次、左）

槍をかわし柄を左手で掴み、その矛先で反対側の左から振り下ろされた剣を受ける。

槍の柄を掴み突く勢いを利用し引く動作と連動した流れで、かわしつつ槍を持った男を右の肘でこめかみに打撃を加え後ろに倒す。

（次、前ハルバート）

重いハルバートが、少し遅れて前方から来た。

振り下ろされた勢いに加速を加えるが如く、石畳に打ち付けられる瞬間に柄を踏み石畳に食い込みます。

槍は男の手から離れていた。

その柄をハルバートの男の首筋に叩き込み槍を捨て矛先で止めた剣士の方に向かうと槍を振った回転を生かした右の拳を顎に当てた。

後ろの二人は剣を持っていた男が、シオンに向うのを止めた一人が、後ろから走り込んでいた男と勢い良くぶつかり倒れた。

動きを止めた残る一人をシオンは、左の剣士を倒した時に踏み込んだ足をそのまま軸足にして、左の上段回し蹴りを顔面に入れた。剣を持っていた男と衝突して倒れた剣士は、シオンの体術に戦意を失っていた。

剣士にモルドールが、近付くと野太い声で言い放つ。

「これが「蚊、ローゼアールヴアル」の力だ。鼻糞共！」

男達は怯えた様に去って行った。

モルドールは何時もの声に戻り集まったギルドの者を促す。

「さあ、皆帰るわよ」

少し遅れてシオンが、アイナの手を取り後に行く。

「どうして……アイナを助けたのですう？」

「助けたら悪いか」

「今回も依頼だったから助けたのですうかあ？」

「違う。俺はお前を護りたいから助けたんだ」

シオンの顔が赤をさしているが、手を引かれ後ろを歩いていたアイナからは見えない。

「うそですう！ 本当はティアナと毎日イチャイチャ出来なくなる

からアイナが同じ部屋に居るのが嫌なのですう」

「違う」

「うそ」

「違ってんだろ」

「うそですう」

「しつこいな、違って言ってるんだろ」

「シオンはティ……むぐう……」

アイナはその先を言葉に出来なかった。

突然、振り向いたシオンが唇で塞いだからだ。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 ゝ 第八話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第九話

† G A T E - 9 恋はバトル

すっかり朝も寒くなり空が高くに見える王都オースティンの街は静かな朝を迎えていた。

昨夜の騒ぎもシオンのキスで一件落着となる？ 筈だったのだが……。

現実と言うのは、恐ろしいものでセインの一言で台無しになった。

シオン達がギルドに帰るとティアナは店の手伝いをモルドールから言いつけられていた。

今回の騒ぎの一端を担い、再三の注意も聞かずシオンの部屋に勝手に入った罰である。

「ティアナ店番ご苦労様！」

セインがティアナに労いの言葉を掛けた。

「うんーもうおー！ 夜中じゃない！ 明日は学院休みだからいいけど書生（学生）をこんな夜中まで酒場で働かすなんて信じられないわ」

ティアナが悪びれる風もなく罰に文句を付けた。

「自業自得よ」

モルドールが腰に手を当てティアナを見下ろし咎める。

ティアナはシオンを見つけると隣にいるアイナに気付く。

「アイナ！ 久しぶりね。やっぱりアイナだったんだ」

ティアナは久方ぶりの再会を無邪気に喜んでいるが、アイナは複雑な思いだった。

先程はシオンにキスされ少し安心した気持ちになったが、シオンの気持ちえを言葉で聞いて無い。

ティアナを見ると、どうにも不安になるのだった。

「どうしたの？ アイナ久しぶりの再会なの？」

ティアナが不思議そうな顔をしてアイナの顔を覗き込んだ。

アイナは気味悪い顔を無理やり笑顔にして言った。

「べ、別にどうもしないですー！ ひさしぶりですなーティアナ」

そんなアイナにセインが尋ねた。

「ねえ？ シオンとはどんな関係？」

「私はーあ……、シオンの恋——」

ティアナの言葉を遮りセインが言った。

「ティアナに聞いてるんじゃない！ アイナちゃんに聞いてるんだよ」

アイナはシオンの後ろに隠れている。

「だだの知り合いよ」

ぶつちよう面で代わりにティアナが答えた。

（違うもん、ただの知り合いじゃないもん、キスしたもん）

アイナは心の中で呟いた。

「アイナちゃんてさー彼氏いるの？ 居ないなら俺なんてどう？

ブレードガンナーの俺なんかさ」

たまたまその場に居合わせたセインが得意げな顔でアイナを口説き出した。

ブレードガンは特殊な武器で扱いが難しく扱える者は少ない。

火薬や魔法を特殊な弾丸に圧縮して詰め使用する。

引き金を引きインパクトの瞬間に発生する火薬の爆発の衝撃波を刃に伝え、超振動を起こし切れ味を上げる。

そのまま剣としても銃としても使え、見た目も格好良く男女問わず懂れた。

しかし、その武器の存在は希少で作れる者は、手にしている本人だけである。

ローゼアールヴアルのガーディアン及び、薔薇妖精の酒場の従業員、給仕は美男美女が揃っている。

見た目だけで決める訳ではないが、基本的にモルドールの好みで採用をする。

「わ、私は、その……」

アイナが言い難そうに口籠った。

アイナは『恋人』と言おうとしたが、第一、特別な付き合いをしている訳でもないしシオンの気持ちに本当に自分に向いてるのか、自

信が持てずにいた。

「シオンはティアナと付き合ってるんだろ？」
セインが言った。

「付き合ってたねえよ」
シオンが否定する。

アイナは、その言葉を聞いて少し安心したのも束の間、次の言葉で嫉妬と言うより爆発的な怒りが込み上げてきた。

「ティアナとキスしてたじゃねえか」

アイナは、その言葉を聞くと無言で外に飛び出そうとしたが、今度はシオンに腕を掴まれた。

「おい待て、何処行くんだ？」

「放って置いてですう」

「馬鹿、外は危険だぞ。他の傭兵ギルドの奴らもいるし、さっきの奴らもうろついているかも知れねえ」

「シ、シオンなんか大嫌いですう」

アイナが腕を振り解き階段の方へ向って走り出した。

「俺、なんか不味い事、言ったか？」
セインがシオンに尋ねた。

「別に」

シオンが短く答えるとアイナの後を追った。

アイナを追うシオンは一人の青年と行き違った。

「待ちたまえ、君、新人だろ？」

二十前半の黒髪に眼鏡の男がシオンに声を掛けた。

「なんだよ。急いでんだ」

「なんだは、ないだろ？　僕が助けに行かなかったら君達は危なかったんだぞ」

「誰よ。お前え？」

シオンはアイナの護衛に出ていて知らないが、一週間程前シオンが依頼に出て直ぐにこのギルドに入った黒髪に眼鏡のガーディアンでアイナの使う筈だった部屋を昨日から使っている人物だ。

（なんだ！　こいつ知らねえ奴だな）

シオンがと思つてると、その人物が自ら名乗り出した。

「僕は、このギルドのスーパーキーにして！　ギルド一番のハンサム『勇者コバカム』だ。C級だが、実力はたぶんB級の魔法剣士。宜しく新人君」

気障たらしくこれでもかという位の笑顔で自信たっぷりに胸を反らせた。

「「お前え！　誰だ」」

その場に居合わせた全員がと言った。

シオンが部屋に帰るとアイナは荷物を持っていた。
シオンは、慌てて止めた。
そして、昨夜は険悪な雰囲気になったのだ。

昨夜なんとかアイナを引き止め誤解を解いたシオンが目覚めた。

「寒む！ 体、痛てえー」

シオンは昨夜、毛布一枚で床で寝た。
ベッドをアイナに譲ったのだ。

何時ぞやの様に一緒の布団に入れて貰えなかったので床で寝た。
昨夜の騒ぎで疲れたのかアイナは、まだ寝ている。
良く見るとアイナは毛布を掛けてない。

シオンは、それが自分に掛かっている事に気づく。

アイナが掛けてくれたのだろう。

「寒いのに風邪引くぞ……この馬鹿」

シオンは呟き僅かに頬が緩むのを感じた。

布団をアイナに掛け、シオンは二階に下りると昨夜の仲間が集まって朝から騒いで談笑している。

「おはよ！ シオン昨夜はあれから愛を語ったのかい？」

「シオン目に隈で来てるうー」

「昨夜は、寒かったねえー。あつ！ シオンは暖かったかあー！ 私にも暖めてくれる人現れないかなあ」
等とシオンをからかう。

「なに、皆して遊んでんだよ。仕事しろ」
シオンが呆れた様な切なげな様な声で言った。

「なんだい！ その言い方は先輩方に失礼だろ。君」

昨夜の黒髪の眼鏡の青年が言い言葉を続ける。

「昨夜、助けて貰ったのに礼の一言もないのかい？ 君」

「あつ！ そうだった。マスターに皆、ありがとうな……それと誰だっけ？ 眼鏡さんもありがとな」

覚えは無いが黒髪眼鏡にも一応、礼の言葉を述べた。

「コバカムだ！」

（……隣の国で魔法玉を追いつける競技が盛んになってるけど……その競技の超有名人に似た様な名前の人がいたな……そう言えば）

「いいのよ。そんな事、みんなローゼアルヴァルの仲間なんだから」

モルドールが身体をくねらせ言った。

周りからも『そんな事、気にするな』と嬉しい言葉と笑みが帰ってくる。

「まったく、君には先輩に対する礼儀が欠けてる」

コバカムが呆れた顔をして言った。

「ごめん、あの、ところで誰でしたっけ？」

シオンが申し訳なさそうに尋ねた。

「コバカムです」

「シオンがアイナちゃんの護衛に出た後、入ってきた……誰だっけ？」

セインが頭を掻きながら言った。

「お願いだから……名前覚えて下さい……」

「コバカムだたか？ まあいい。お前の後輩な」
レイグがポツリと呟いた。

コバカムは歳の若いシオンを自分の後輩だと思っていたのだ。

「もういいです……何でも」

「なんだそうだったのか、で、誰だっけ？」
シオンが尋ねた。

「コバカムだあ！ ギルドでは君の後輩になるけど年は上だ。それに昨夜、助けてやったるスーパールーキーの僕が！ 炎帝と呼ばれるレイグさんに憧れ守護者ギルドが、試験運用の時から研修を受けた一年半でライセンスを取ったんだぞ！」

コバカムが得意げに言った。

研修は通常三年請ければ期間満了で修了試験をパスすればC級のライセンスは貰える。

初期でB級以上を得る者は皆、一年以内に研修を終える特進で試験と総合評価を基に規定に沿い与えられる。

「コバカムさん昨夜、何時から来てた？」
アイスマンが尋ねた。

「傭兵どもは僕の顔を見て恐れをなし逃げ出したからね」

「もう、終わってた頃だ」

と全員が思った。

「あの？ 昨夜、シオンの戦闘見てませんでした？」

ギルドの先輩だとしても一応、目上のコバカムにセインが恐縮しながら聞いてみた。

「見るも何も僕の顔を見て逃げ出したんだ。それにこの少年が複数の傭兵と戦闘したなんて信じられるかい？」

「じゃあ、シオンの初期クラスも当然、知りませんよね？」

「知らない！ 僕クラスになれば見れば分かる」

「非常に申し上げ難いのですが、シオンはA級ですよ？ それにレイグと対等に渡り合ったんですよ」

「……リアリー？」

「本当だ。俺も全力ではなかったけどな」
レイグが淡々と喋った。

ローゼアールヴアルは一ギルドとしては、そんなに大きくないむしろ小さい方だ。

所属する守護者は皆、研修を一年以内に終わらせたか、元々実績のある精鋭揃いのギルドと言った方が良い。

モルドールの人を見る眼力と人柄で皆が集ったギルドだ。

そんな中、アイナが起きて皆の居る二階に來るとシオンの後ろに隠れ挨拶をした。

「お、おはようですう——」

「かわいい」

美少女というものは、くちゃくちゃの寝ぼけ顔すら様になる。

皆とそれぞれ気さくに挨拶を交わすとモルドールが、シオンに銀の通貨の詰まった革袋の財布を渡した。

「それでアイナちゃんの身の回りの物を揃えてあげなさいな」

「いいんですか？　こんなに」

「いいのよ。元と言えば私のミスだから」

ギルドの扉が開くとティアナが入ってきた。

「おはよー！　シオン——買い物付き合ってよぉー」

「お前な！　毎度毎度、買い物に行く度に来るけど俺は荷物持ちじやねえ」

「だめですう！　シオンは今からアイナとお買い物ですう」
アイナが、ツンとした態度で言った。

「シオンを独り占めする気？」
ティアナが目を細めアイナを睨んだ。

「べ、別にそういう訳じゃ……、これはギルドのお遣いで……」
先程の強気は何処へやら、アイナは俯き声を潜めた。

「なら、一緒に行けばいいじゃない？　わたしも買い物したいから
四人で行きましょう」

そう言ったのは二十歳位の水色の長い髪の女性だった。

「わたしはサモンサーモナー（召喚魔道士）のミル、よろしくうー
ね」

王都オーステインで新たにシオンを巡る恋のバトルが起こるのか？
それを知るのは神でもなく誰でもないオーステインの高い空だけ
だった。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 ゝ 第九話（後書き）

最後まで読んで下さいますと誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第十話

† G A T E - 1 0 リング

冬支度の始まるオースティンの街並みに新しい生活の支度を始める少女の姿があつた。

シオンが小声でミルに言った。

「ミル姉えありがと。助かる」

「なあにが？ わたしは本当に買い物があるからよ」

目を細め色つばい視線をシオンに送った。

シオンの背中に冷たい物が走った。

とってつもなく嫌な予感がする……。

「あの二人の板挟みになるシオンが、可哀そうで愛おしくてお姉さんが着いて行かないと、ね」

しかし、ミルの大人の振る舞いに、嫌な予感は吹き飛んだ。

「今のあの二人に付き合わせられてたら身がもたねえ。ミル姉えが居てくれて助かる」

シオンは胸の奥にのこっている嫌な予感を振り払いミルに話し掛けた。

アイナの天然、ティアナの我儘に、挟まればA級のガーディアンでも齒が立たない。

「そう、わたしもシオンに興味あるんだけどなあー」

ミルが髪を指で弄りなが言った。

「またミル姉えまでからかうなよ」

「あら、本気だったらどうする？」

「へえ？」

シオンは腑抜けた声を出した。

アイナとティアナは、シオンを巡り白熱している様だ。

「ねえーアイナ？ シオンと同じ部屋だからってヘンな事したら駄目だかんね」

ティアナが目を細めてアイナを睨んだ。

「へ、ヘンな事ってなんですか？ ティアナこそシオンの部屋に下着姿でいたですよ」

アイナは眉をつり上げ拳を握り締める。

「なっ！」

「本当は、はだか」

「……うそですよ！」

「あら、何時もの事よ」

ティアナが勝ち誇った様に頬に出を当て高笑いをした。

「い、何時もですとお！ あれ程シオンに手を出しては、ならんといつたですよのに——！」

「だってアイナに恋人なの？ って聞いた時、否定したじゃない」

「そうでしたかあー？ 覚えがないですよー？」

「いい？ 私達はお友達だけど恋ではライバルだかんね」

アイナとティアナの眼線上に見えない雷撃が激しくぶつかり逢っている様な錯覚と幻聴に襲われ思わず ミルの方を向くシオンだっ

た。

「シオンは絶対！ ぜった——いに、やらんですう」

「それはシオンが決める事でしょ？」

二人がシオンの方を見ると色っぽい大人の色気くを放つミル容姿に顔を赤らめるシオンが目映った。

「シオン」

二人に怒鳴られるシオンであつた。

街の中心部辺りに大少様々な店が建ち並ぶ商店街。

女性三人買い物が、始まればたちまち、シオンは荷物持ちと化するのである。

それは、もう荷車の様に次々とシオンの手に納められていくのである。

当たつちまつた……、嫌な予感が……。

「ちくしょう！ ミル姉えー、これが狙いか、そうか喜んでた俺が馬鹿だった」

シオンは心底、己を恨んだ。

「なに、ぶちぶち言ってるの？」

ミルが妖艶な笑みを浮かべた。

「鬼！ 悪魔！ なんで俺が荷物持ち？ しかも三人分」

「ほら行くわよ。役立たず」

「なっ！ 今度仕返ししてやるからな」

「シオンが？ このわたくしに？ 言っておくけど私くしレイグより強くてよ」

「嘘付け！ レイグはエースだろ」

「本当よ。わたくしS級のガーディアンですもの、おほほほほ！」

「……マジですか？ でもレイグも実力は既にS級だろ？」

「確かにレイグは強いわ。アビリティーの相性が問題ね」

ミルがそう言うといいなの方を指差した。

アイナはチェスト等が置いてある収納具の店に居て何やら大きなチェストを見ていた。

「おい！ そんなにでかいの部屋に入れたらお前のベッド置けなくなるぞ」

シオンが慌てて嗜める。

ローゼアールヴアルの三階にある部屋は十五畳程もあるが、ベッド二つとシオンのチェストにアイナの见ているサイズのチェストを入れれば居場所は、ほぼ無くなる。

しかもシオンの部屋は角部屋で窓が多く風抜けや日当たりは良いが、家具を置く場所が限られる。

「ベッドなんぞいらんですう」

アイナが漂々とした口調で言った。

「ちょっと待て！ 俺はずっと床で寝るのか？」

「シオンは野宿に慣れてますし依頼に出ればベッドは一つでいいです」

「そうだけど、帰った時くらいバッドで寝かせろ」

一瞬、そうかと納得しそうになったが、部屋に帰った時位はやわらかいベッドの上で眠りたい。

「別に構わんですよ。シオンが膝まずいて頼めばアイナの隣に寝かしてやるです」

もうどっちが部屋の主なのか分からない状態だ。

平民のアイナには大き過ぎる代物だった。

シオンの悲願で何とか相応のチェストにして貰ったが結局、シオンが使う事は少ないベッドは買わなかった。しかし、床というものもなんなんでも代わりにソファを買いシオンのベッドにする事にした。

下着売り場での買い物の際は散々待たされたあげくの果てミルに売り場の中に連れ込まれる始末のシオンだった。

日用品が揃うとシオンを除く三人娘は宝石商に向う。

「まだ、買うのかよ」

シオンが疲れ果てた声で言った。

「これからが本番よ」

ミルが拳を握って揚々としていた。

三人娘達は、あれが、かわいいだのこれが綺麗だのはしゃいでいたが、公爵家の娘のティアナと高給取りのS級ガーディアンのは、気に入った物を次から次へと買い始めるとアイナは寂しそうな顔になった。

そりゃアイナも女の子。

欲しいいくとも平民のアイナに買える筈が無い。

買い物も終わり帰り際、シオンが口を開いた。

「俺、評議会に寄つてくから先に帰つてくれ」

大きな荷物は後日、運んで貰える事になっている。

「そう、じゃあ、アイナちゃんに場所教えて置いてあげれば？ ギルドの仕事でも来て貰う事になるし少し街の事教えておいてあげれば？ 昨夜の事もあるし……そうしなさい」

ミルが言つとシオンの耳元で言った。

「今日は頑張ってくれたから、これで解放してあげる。感謝しなさい」

そう言い片目を閉じた。

「さあ、帰るわよ。ティアナ」

「えええ！ シオンはー」

「シオンは、これから評議会よ。あんた昨夜、寮の門限過ぎたでしょ？ 二日続けるのは不味いでしょ」

「荷物はどうするのよ」

「ティアナが持つのよ。私の分もね」

ティアナは、ぶちぶち言っていたが、ミルに逆らえずに帰って行った。

帰り道とは逆に向う方角に評議会がある。

シオンはアイナの時の依頼報酬を受け取り出ると二人はギルドに向かい歩き出した。

アイナが目には“ホワイトデルムン”（白い楽園）と称される白く美しい王宮の方に目を移すと夕陽に染まり赤く染まった王宮が目に見え込んだ。

その幻想的な景色は王都オースティンの観光名所となっている。

「綺麗ですう」

アイナは目を爛々と輝かせ、その景色に見入っていたが、視界の下に大きな木を見つける。

「シオン？ あの木はなんですか」

「よく知らないけど“フィクス・ルミナリス”で神樹らしい。人間の始祖があの木の下で生まれたて記述があるらしいぞ」

始祖の生誕については、グラジニアス大陸に何箇所か記述は残っているが『フィクス・ルミナリス』が一番古いとされている。

フィクス・ルミナリスは不思議な力で何千年もその場に在るのだと云われ、一年に一度その枝に三日間だけ実を付ける。

その実の大きさは金柑の実程の大きさで七色の光を放ち、たわわに実るがその実が落ちた事はないらしい。

その実をとる事は禁止されて今まで落ちた事は無いらしいが、自

然に落ちてきた実を拾い誓約を誓うとその願いが叶うと云われ今では普段から恋人達が、フィクス・ルミナリスに永遠の愛を誓いに来るようになった。

実を付ける日は、決して変わる事が無くそれに伴い“誓約の神樹”と称されている。

実を付けるその日の前後三日間を『聖誕祭』とグラジニアス大陸全土でされていてこの期間は例え戦争であっても休戦になるくらいだ。

シオンとアイナは元来た道を引き返していた。

途中で買い物をした店並みを通り過ぎ様とした時、シオンの中に寂しそくに装飾品を見ていたアイナの顔が浮かんだ。

「あ！ 俺の買い忘れてた。見てくるけど、お前も来るか？」
シオンがアイナに尋ねた。

「別に、構わんですう」
寂しげにアイナが答えた。

二人は、店並みの中に入って行くとシオンは魔法生物を扱う店に入った。

「うわぁ！ 高ええな。デミ・ドラゴン」
シオンが、付けられている値札の数字に驚く。

「ラナ・ラウルの銀貨で八百枚もするのかルミナリス金貨だと……約百十八枚……買えん」

グラジニアス大陸での収入は、ラナ・ラウル銀貨で平均約二百枚

位、ルミナリス金貨で約三十枚だが、地方の物価にもよるのだが、ガーディアンの上級の年報は平均ルミナリス金貨で三百枚程になる。

S級とA級とでは、報酬は雲泥の差がある。それにシオンはA級と言ってもランクの低い依頼をこなしているのだから夢の様な額だった。

依頼のランクと内容で差は激しく、一つの依頼が銅貨数枚から金貨数千万のものまである。

「お兄さん！ ガーディアンの方ですかい？ 今なら好きなアビリティー付きでラナ・ラウル銀貨で八百万枚でさあ」
「無理。今度にする」

「仕方ねえ。ガーディアンの方でいやあ。民の安全を担ってるお方だ。ここは涙を吞んで六百五十万にアビリティーを付けて六百八十万にしときやす」

商人は、にやにやと笑みを浮かべた。

シオンは逃げる様に店を出た。

「高ええ。暫らく馬でいいか」

「聖獣捕獲にいくですう！ ペガサス、ペガサスう——！」
アイナが浮かれて言った。

「そうだな、近い内に行くかって言ってもペガサスって何処にいるんだ？」

「しらんですうよ」

「リーシャにでも訊くかあ？ もう一軒寄りたいんだけどいいか？」

「いいですよ」

アイナは、ちよつぱりデート気分を楽しむ事にした。

シオンが露天の装飾品店に立ち寄るとアイナの手を取った。

「兄さん、鍊金物と天然物の石とありますが、今の鍊金石も立派な宝石でさあ」

商人が笑顔を浮かべている。

並べられている中に美しくも妖艶な輝きを放っている澄んだ紅の宝石があしらわれた指輪が目に入った。

それを支える台座のリングは、粗悪な彫り物が施されている。

シオンは、その指輪をアイナの指に嵌めてやった。

「いくら」

「それは鍊金物でも出来がいいやつでさあ。下手な天然石より綺麗なでしょう？ その指輪は旅の古物商から仕入れた物で古物商が言うには、古くから存在した指輪でそうです。しかし、兄さんなかなかの目利きでえ、それに敬意を払ってラナ・ラウル銀貨十枚でもうつおまけしときまさあ」

「これなんか、そちらの姉さんとお揃いでどうです」

そう言うと同じデザインの物を商人が取り出した。

勿論、ぼつられてるのだが、綺麗な物は値と比例する事無く綺麗な事に違いない。

「これでいいか」

アイナは何も言わずに、こくりと頷いた。

「毎度、ありがとうございました」

ホワイトデイルムンは白い城壁を夕陽で赤く染め衣を変えて、街中の二人を見下ろしていた。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 ゝ 第十話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第十一話

† G A T E - 1 1 報復ののろし

寒空の広がる王都オースティンの空、賑やかな街並み。

そして、その陰では陰謀が生まれる。

守護者ギルドローゼアールヴアルの朝は何時もの様に賑やかに始
た。

毎朝の様に報告に来る依頼帰りのガーディアンとこれから依頼に
向うガーディアンが入り混じりてんやわんやの大騒ぎ。

それに加え依頼を探しに来たり、ただ遊びに来ている者もいてざ
わついている。

低血圧のアイナが雄たけびを上げた。

「お前らあ！ 静かにしやがれですう——！」

朝から騒がしい空気に静けさが戻た。

アイナもギルドに来て二週間程。

仕事のクエスト管理にも雰囲気にも徐々に慣れ、すっかりローゼ
アールヴアルの一員となつてなつていた。

「どうしたの？ アイナちゃん機嫌悪いねえ」

静寂の中セインが口を開いた。

「別に」

アイナが短く答える。

「もしかして、生い——」

アイナの投げつけた文銅がセインに直撃した。

「お前ら！ ぺちゃくちゃ騒いでないで、とつとと依頼にいきやがれえ——ですう」

「い、いや俺は依頼終了報告にきたんだけど……」
セインが腫れ上がった額を押さえて言った。

アイナの周りには、どす黒いオーラが出ている。

その威圧感に、強者揃いのローゼアールヴアルのガーディアンも
圧倒される振るえ上がった。

気押された者達が、口々に「俺もです」「私もです」と言い出し
アイナの座る机にギルド提出用の依頼報告書を置いて行った。

高クラスの依頼は少ないが、高ランクのガーディアンも少ない。
特にAクラス以上の依頼が、最近増え始めモルドールの管理を離
れたシオンもAランクの依頼をこなし始めていた。

後、一週間で“降臨祭”の前後合わせて九日間の休日期間に入る。
その為、出来るだけ依頼を多くこなしておく必要もあった。

「疲れるわぁ。この時期は、ホント」
ミルが戻って来るなり、ぼやいた。

続いて無言でレイグが入ってくる。

「ふう——疲れた」
アイスマンが息を吐いた。

「ただいまぁ」

疲れ切った声でシオンが戻ってくる。

他のガーディアン達も戻ってくる。
そうなるアイナの仕事が増える。

アイナの仕事は依頼振り分けだけではないのだ。

一番の悩みは、山の様に積まれている洗濯物だった。

依頼上、どうしても野宿が増える守護者達は、持っていた着替えを洗濯できない事も多く、また洗濯できる環境であるとも限らない密林や砂漠等の厳しい環境の中の依頼も多い。

ガーディアン達が洗濯物を洗い場に置くと直ぐに次の依頼を請けて出て行く。

アイナの他にも従業員がいるが、とても間に合わない。

最近シオンとも話す事も少なく、それが更にアイナの苛々に拍車を掛けている。

「いやあー！ 疲れるよ。はあはあはあ」

コバカムが清々しい顔をして帰ってきた。

「この時期は子守りも増えて大変だよ。皆お疲れの様だね。僕はスーパールーキーこれ位いの忙しさは何でもないけどね」

余裕の態度で言い放つと言葉を続ける。

「君、これを洗っておいでくれたまえ」

アイナの前に洗濯物を突き出した。

アイナの体が、ぷるぷると震え出す。

それに気付いた者達は、そそくさとクエストボードへと動き始めた。

「さてと次の依頼どれにするかな」

次々と蜘蛛の子を散らす様に依頼を取りギルドを出て行く。

残ったガーディアンといえば、Aランクの依頼をこなしてきたばかりのシオン達五人と子守りの依頼を終えたコバカムだけだった。

「お前らも、早くいきやがれですう！」

アイナの咆哮が空気を震撼させた。

「はい」全員が返事をした。

全員がクエストボードに向い依頼を取りに向かうとアイナがポツリと言った。

「シ、シオンは、ゆっくりでいいですう」

「「お前も来い！」」

皆に連行させれるシオンだった。

ギルドの酒場で休憩を取る事にしたシオン達。

「まったく。シオンにだけには甘いよな。アイナちゃん」
セインが僻んだ。

「そんなことねえよ」

シオンが否定する。

「しかし、あんた達気合入ってるわねえ」

ミルが言つとセインが揚々として言った。

「当たり前だ！ もう直ぐ降臨祭だからだ。レイグ！ 今年は負けないぞ」

「ああ！ あれね。それで張り切って依頼こなしてるんだ」
アイスマンがニヤリとした。

「俺は興味ないけどな。でも負けるのは、ごめんだ」
負けず嫌いのレイグが言う。

「ホント、男って、こんな事で意地になるんだから……」
ミルが呆れた風に言った。

シオンに、何の事だか分からない。

「何の事だ？ 何かあんの？」
シオンが尋ねるとセインが立ち上がり酒場の壁を指差した。

「見る！ あれを何だと心得る！ ガーディアン人気の指標だ」
セインが指差した方には簡易クエストボードが掛けられている。

「あれが、どうしたんだよ」
シオンはそれが何だという様に言った。

「そうか、シオンは初めてだよね」
アイスマンが言った。

「あつ！ 僕も」
コバカムが言う。

「あのクエストボードに、この酒場に来る女性客や街に住んでる娘達が、自分の好みのガーディアンに依頼書を張るんだ。その件数が多いガーディアンが一番人気があるて事、ちなみに僕は去年の二位ね」

アイスマンは自慢げに言った。

「一位がレイグよ。で、三位がセイン」
ミルが言った。

「くだらねえな」
シオンが興味なさげに言った。

（負けるか）

と思うシオンだった。

「そうよね。偉いシオン！ こんな汚れた大人になっては駄目」
ミルが目を細めてシオンを見詰めた。

「ふうふうふう…… 今年は、超ハンサムスーパーキーコバカム
が一位は頂くよ」

ミルを除く五人は、決して表には出さないが、早くも胸の内で激しいバトルを始めている。

「私には関係ないから興味ないわ」
ミルが詰まらなそうに言っけてリクエストボードに目をやった。

「あら？ もう貼ってあるわね」

「たぶん、店の女の子達だよ。降臨祭に入ったら忙しくて貼れないから、今の内に貼ってるんだ。自分の憧れや好意を持つガーディアンと一日、デート出来るんだからね」

「ふーん、そうなの」

ミルが妖艶な笑みを浮かべるとボードの張り紙を見る。
ガーディアンの名前を書いて貼ってあるのだが、誰が書いたかは分からない。

「シオンとレイグが人気を二分してるわねえ。でも誰が書いたか名前書いてないから分からないじゃない」

「ガーディアンの名前は、普通のインクで書いて自分の名前はマスタの調合した特殊溶液入りのインクで書くんだよ。当日の抽選まで分らないし一人一票ね。重複や複数投稿は無効になるんだ」
アイスマンが説明した。

「そう、私には興味ないわ」

ミルが言つと羽根ペンえお取り、何やら書き始める。

「なにしてんだあ？」

セインが聞いた。

「別に」

短くミルが答えると紙切れをクエストボードに貼り付けた。

「ああ！ ミル、シオンで書いて貼ったろ」

セインが言つとミルが少し照れくさそうに言った。

「いいじゃない……新人のシオンの応援よ」

一番の新人はコバカムだと皆が思った。

アイナが依頼振り分けをしているとモルドールを呼ばれる。

「アイナちゃんー、これを評議会までお願いできるかしら」

モルドールが依頼完了報告書をアイナに手渡した。

「評議会の場所は知ってると思うけど裏通りには入っては駄目よ」

「はい、分かったです」

アイナが書類を受け取り評議会に向いギルドを後にした。

アイナは外出する時、前髪を下ろしオッドアイの瞳を隠している。評議会に向かう途中にある店並み沿いを通って歩いていく。

アイナは左の薬指に嵌められたシオンの買ってくれた指輪を見ると笑みが浮かんだ。

前方には、この前に見た『ホワイトデイルムン』と違い、真っ白の宮殿が見える。

太陽の光を浴び眩しい位に白く見えている。

その視界の下に冬にも関わらず、フィクス・ルミナリスが生命力に満ちた新緑の葉をそよ風に揺られていた。

アイナが評議会に着き中に入った

その物陰でなにやら、ひそひそ話す人物がいた。

「あの娘で間違いないのなだ」

深々と帽子を被った男に尋ねた。

「はい、間違いないです」

「巨人を刺すとは、哀れな“蚊”だ」

男は唇の両橋を吊り上げ笑みを浮かべた。

アイナが評議会から出ると辺りは、ほんのりと赤い日差しに変わ

っていた。

「やれやれですう」

アイナが溜め息を付く。

この時期、他のギルドも駆け込みで大量の書類を出しに来るので混雑している。

アイナはギルドに向かい歩き出すと暫らくして一瞬、人が途切れ
た。

その時を見計らった様に物陰に居た二人がアイナに近付いた。

「ちよつと一緒に来てもらおうか」

アイナの口を塞ぐと一人の男が、呪文を言葉を呟いた。

「水の理、体内、内に流れ、知覚に関するもの、眠気を誘え」

男が呪文の詠唱を終えアイナに向け剣を振った。

「スリープ」

アイナは魔力を感じたが、戦闘経験の無い上に不意を付かれ対処
出来ずに眠りに就いた。

男がアイナを抱えると街から少し離れたギルドに向った。

シオンは一階にある酒場の開店準備を手伝っていた。

他の者達は依頼に向かったがアイナが咆哮した際、引きずられる
ように下に来たシオンは依頼を取り損ねたのだ。

するとモルドールが心配そうに呟いた。

「アイナちゃん遅いわね。この時期は込むけど、心配だからシオン
くん迎えに行った頂だい」

シオンはアイナを迎えにギルドを出ようとすると依頼から帰って
きたコバカムが入った来て言った。

「いやー今日の子守りは疲れたよ。よく泣いてうるさくて……そういや、あのうるさいオツドアイの娘、二人組みの男に担がれてたな。まあいいや静かで」

それを聞いたシオンは怒鳴る様に言った。

「本当か？ お前なんで追わないんだ！ 馬鹿、どっちに向った」

「西に向って行っただよ」

「何か特徴はなかったの」

モルドールが聞いた。

「確か一人の男のローブには、剣を持ち交差させる大きな手が施してあったな」

「タイターンの奴らね。西に向ったところを見ると間違いないわ」

シオンはリーシャ呼ぶと直ぐにアイナを追わせた。

ギルド間の問題は複雑だ。

シオンは苛立ちを押さえモルドールの判断を待った。

「許可下りたわ。あいつら評議会からも目を付けられてたようね。人身売買の容疑が掛かってるわ。シオンとコバカムでこの依頼を請けなさい」

モルドールが野太い声色に変えて言った。

「ギルドごと潰しなさい。タイターン・ノーズは人数の多いギルド。誰か戻り次第増援に向わせる」

シオンはそれを聞くと、まんおじして外に飛び出す。
後を追うコバカムが続く。

シオンは急いぎ、リーシャに信号を送り思念で話し掛け指示を出

し、現在地の位置を知る。

「アイナ、必ず助けてやる」

シオンの眼は怒りとに満ちていた。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 〵 第十一話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第十二話

† G A T E - 1 2 囚われの少女

陽を浴び、ホワイトデイルムンが衣を白く替えて纏っている姿は眩しく美しい。

王都オースティンの西に小さな森がある。
傭兵ギルド、タイターン・ノーズのアジトがそこにあった。

「君！ 走って行くつもりかい？」

コバカムがギルドを駆け出したシオンを止めた。

シオンは、タイターン・ノーズの場所が、知れた以上リーシャに探させる事はない。

街の外でリーシャを呼び戻すつもりだった。

例え、リーシャの事が皆に知れ様とも、アイナの身が危険な状態である以上、悠長な事を言っている場合ではない。

コバカムが、ペガサスを二頭引いている。

シオンは、それを見てリーシャに信号を送り、そのままアイナを追わせた。

「お前すげえな！ ペガサス二頭も持つてるの？」

シオンは驚き声を上げた。

「まあね。僕の実家は金持ちだからねえ」

コバカムが得意げに髪を掻き上げた。

コバカムの家元は金持ちの貴族の次男で、何れ子爵の名は兄が受けると話した。

シオンが、初めリーシャに伝えた事は見つけ次第救出を最優先。

——後に敵の殲滅。

それまでに見つけていなければ呼び戻す。

それがシオンが出した最初の指示だった。

アイナの命が掛かっている以上出し惜しみはしない。

「それ借りるぞ」

シオンは、急ぎペガサスに跨りリーシャの後を追いつ飛び立つ。

後にコバカムも後に続いた。

暫らくしてリーシャから信号が届いた。

「シオン！ 奴ら森に入り込んだあ。森が深くギルドの正確な場所

は、まだ見つからない」

「分かった」

ギルドを出る前、タイタン・ノーズの傭兵に脅された少年が手紙を持ってきた。

——内容は取引。

内容は、アイナを人質から解放する代わりにローゼアルヴァルの解散だった。

少し安堵の表情を見せたシオンにその信号を感じたリーシャが思念を送った。

「シオンは、ぜえーんぜえーん分かってない“人質”て言うのはねえ“命”さえあればいいの。あの娘が、どれだけ汚されもね……」

シオンは、ペガサスに鞭を入れ速度を上げる。

「シオン！ 森の入り口に傭兵達が伏せしてる気を付けて！ 数あー、ざつと五、六十。中には獣やゴーレムを操るハイメイジも居るみたい。総数が増えるよ」

「お前の魔法とゴーレムで何とかしろ！ 楽勝だろうが！」
シオンが苛立ちを露に怒鳴った。

「分かってる？ 戦闘が始まれば、あの娘の生命の保証はなくなるんだよ？ こっちの援軍が来る前に、わたし達だけで先にアジトだけでも見つけておかないと、ダメだよ」

小さな妖精の姿で飛ぶリーシャを見つけたのは、一匹のエメラルドの様に美しく澄んだ鱗の竜だった。

体長十五メートル程の人間で言えば青年位の年齢の竜。

その竜にリーシャが、竜の鳴き真似て喉を鳴らし道を開ける様に促した。

返事は無くその竜は、これが答えと言わんばかりに炎のブレスを吐いた。

リーシャが小さな身体を捻り回転しながら、僅かにかわすと高速ですれ違う。

「あの竜……。 “眷属”？」

吐かれたブレスの質と鱗の極めの細かさでリーシャは見抜いた。

眷属の竜は、現在種より遙かに賢く長生きで言語感覚に優れ人語を操る。

旋回し後ろから炎のプレスをリーシャ目掛け放ってくるが、リーシャはそれを右に左に難なくかわす。

「きみ眷属の竜？ 何故こんな所に居るの？」

「人語を操る？ 貴様も長い時を生きる者か？ 俺は森に入る者を討つ様に言われている、悪く思うな」

リーシャが人語を話すのを知り、その竜は人語で答えた。
現在種より賢い眷属は滅多に人に姿を曝さない。
ましてや人に使われる事など無い。

（眷属が人間の命令で動く？ ……にしても攻撃に殺意を感じない）

リーシャは、攻撃の邪気の無さに気付き、羽ばたきを止め翼を水平に伸し滑空した。

眷属の竜もリーシャの後を追いつき滑空に入る。

後ろに回り込むとプレスを吐く体勢を整えた。

リーシャは姿を変えると翼を開き羽ばたく事無く、加速し急上昇をする。

あっという間に眷属の竜の視界から消え、光の反射で七色にも見える光膜を引き百八十度、虹の弧を描く様にの円運動をし真上に張り付いた。

「やれやれだお……、この姿に戻るのはいやなんだよねえ」

籠る様でもあり、澄んでいる様でもある声。

リーシャの姿は人型。

頭には額の辺りから伸びた四本の角、眼は薄い黄色でその中に丸い眼球が三つ有り、キューインと音を立て眼球の外淵を正逆に回転させている。

黄金の身体は左右対称で鎧を着けた騎士のそれに似ていた。

背中に張り出した瘤の様な突起物からは有翼獣のそれではない光の翼が伸びていた。

瘤の様な背中の突起物の周辺、特に下部の辺りは空気が淀み陽炎の様に揺れている。

突起物の上部と腰の辺りには、四角い口を空けた細長い突起物が備わっていた。

離れていても感じる凄まじい熱量を放出している。

「お前はなんだ」

眷属の竜が問うた。

「鬼神とまでは、まだいかないけど……近い者かなあ？」

「それは“亜種”の新種なのか？」

「急ぐんだよね……竜さんも分け有りの様だけど、シオンの大切な人の居場所を聞けるかも知れないから話を聞くとしますか」

リーシャは、問いには答えず眷属の竜の翼を抑え羽ばたきを止め、そのまま地面に滑空した。

「シオン聞こえる？ 今、敵に組する竜を捕まえた。こいつがあの娘の囚われた場所を知ってるかも。今から聞き出すけど、シオンも急いで！」

リーシャがシオンに思念を送った。

「分かった、頼む」

シオンは短く答えた。

森の傍まで来るとシオン達に向け矢が放たれる。

どうやらリーシャの言っていた待ち伏せをしていた傭兵の様だ。

シオン達が矢を払い弓を持つ傭兵の傍に降り立つと弓を切り落し傭兵を当て身で倒す。

コバカムは、そのガーディアンランクに沿わない実力を見せ敵を翻弄していた。

接近戦様の武器を持つ傭兵達は相手が二人である事を知ると森の中から続々と姿を現した。

メイジ達はゴーレムを創り出している者もいた。

リーシャの報告より数が多い。

森の中に隠れていた数まで正確には、如何なリーシャといえど見えるものではない。

シオンもガーディアンとして依頼をこなす内に大分上手く攻撃系の魔法を使える様になって来てはいるが、精霊魔法、不思議な力については、まだ己が意思のまま扱う事が出来ないでいた。

シオンに焦りの色が見える。

シオンも力を出し惜しみをする訳ではないが、アイナを助け出す前に魔力と体力を使い切っては意味がない。

傭兵、メイジ、ゴーレム、魔獣を合せ、約三百を超える敵を前に、二人ではなす術はないが、諦める訳にもいかない。

「よう！ また苦戦してるじゃないか？ A級が泣くぞ」

聞き覚えのある声がする。

セインの声だった。

レイグ、ミル、アイスマンもいる。

「どうしてお前らがいるんだよ」

「いやな、聖誕祭に向けて、ここの所依頼こなしまくったからな。高ランクの依頼はミルのS級の依頼一つだけだったから経験値を上げるのについて行ったんだ」

「このメンツだからね。直ぐ済んだよ」

アイスマンが唇を釣り上げた。

「近くだったしな。ついでに寄ってやったんだ」

レイグが鼻を鳴らしつまならそうに言った。

「嘘よ、マスターからの報告が入ったの。それにレイグが一番やきもきしてたじゃないの？」

ミルが目を細めレイグを見た。

「まあ、なんだ。俺はシオンのお目付け役だからな」
レイグが誤魔化す様に言葉を濁した。

「それよりお前は、お前の成すべき事をしろ」
レイグの眼光が鋭くなった。

「俺達が、ここを引き受け持つてやる。お前はアイナちゃんの所に行け」

セインが言うとシオンの前に出る。

「援護するよ。シオンはペガサスに」

アイスマンが言うと冷気に満ちた目になり傭兵達に視線を移した。

「ほら！　いくわよ、皆」

妖艶な笑みを浮かべたミルが言った。

「皆、済まない」

シオンがそう言うのとペガサスと呼び跨り天高く駆け上った。

上空の敵が現れシオンを追うが、無数の氷の矢がシオンの行く手を遮らんとする魔物に乗った兵を射落とした。

アイスマンの放った矢だ。

後を追おうとした傭兵の前を炎の壁が遮る。

レイグの魔法だった。

シオンはアジトを目指した。

眠りの魔法から目覚めたアイナの前にはタイタン・ノーズのギルドマスターと幹部達、それとアイナに眠りの魔法を掛けた人物がいた。

アイナは手足の自由は奪われている事に気付く。
幹部達が、笑みを浮かべてアイナを見て言った。

「お頭、こいつはあ上玉ですね。奴隷商に売りつけるのが、勿体ねえや」

「その前に、俺達が楽しんでもいいですか？」

「好きにしる。余り無茶はするなよ。大事な商品だ」

頭が言々と男達がアイナの周りに集まり我先にと口論を始め順番を決めている。

「下衆どもが」

その光景を見ていたアイナに眠りの魔法を掛けた男が呟いた。順番が決まったのか一人の男がアイナに近づいた。

アイナは自分の身に迫る危機に顔が蒼白になっていく。

「俺が最初だ。楽しませてもらうぜ。嬢ちゃん」

男がほくそ笑むとアイナの着衣に手を掛けた。

「いやあ——」

アイナの悲痛な叫びが、冷たい岩で囲まれたギルドの中に響き渡った。

To Be Continued

ゝ 漆黒の守護者 〵 第十二話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―） <

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第十三話

† G A T E - 1 3 閉ざされし扉

被い茂る森の木々は陽の光を遮り辺りの空気に気温以上の冷氣を与えている。

その森も中に幾つかの大きな岩山があった。その中に一際大きな一枚岩山が大きく鈍重な扉となつて聳えていた。

その一角に鬼神の姿をしたリーシャと眷属の竜がいた。

眷属の竜はリーシャに押さえ込まれ、首には四角い腕が巻かれ締め付けていた。

今のリーシャの姿は眷属の竜より五・六メートル程大きく、その力は五百年程生きている成長過程の眷属の竜を遥かに勝っていた。

普段は妖精の様に身体を小さくしていても鬼神の姿のリーシャに適う訳がなかった。

「きみの攻撃には何処か迷いがある」

リーシャが何処からか音声を出した。

「……」

眷属の竜は答えない。

「言つたでしょ？ 先を急いでいるて私の半身（兄妹）でもある人間の大切な人が、このギルドの奴らに囚われたの」

きみは「この森に入る者を入れると言われた」と言つてたね、なら何者かに命令されての事でしょ？ 何か知ってるのなあ？」

リーシャが問うた。

竜が暫らく考えていたのか、やがて口を開いた。

「お前、さつき「兄妹」の大切な者が囚われたと言ったな？」

「うん、言った。それがどうかした？」

リーシャが答える。

「俺の妹が、この人間どもに捕えられた。妹は、まだ幼生で力も弱く臆病だ。ある日、このギルドに雇われてる魔法の使い手に捕まりこの岩山の砦の何処かに幽閉された」

——眷属は希少だ。

「それできみは、その人間の言いなりになってる？」

「そうだ。この岩山の砦の扉は奴らの結界魔法が付与されていて俺の精霊魔法のデスペルだけでは開かない、俺の炎のブレスでもびくともしないし体当たりしてもな」

眷属の竜は苦々しい口調で言った。

「そうつか……だったら、ついでにきみの妹も一緒に探してあげる。一人助けるのに一匹増えるだけだからな然程違わないよ。それより娘はここに居るの？」

リーシャがそう問うと眷属の竜が頷き喉を震わせた。

「一人の人間の娘をここに運んできた、その直後に命令が下りたのだから十中八九ここに居るだろう」

「その娘の特徴は」

リーシャは念を入れて聞いた。

人違いなら意味がない。

「人間にしては美しい金髪で長い髪の娘だった。それにオッドアイの瞳」

間違いないアイナだ。

リーシャはその事と自分の居る場所をシオンに伝えた。

森の外では、凄まじい戦いが繰り広げられていた。

レイグ達が戦い始めて暫らくすると何人かのローゼアールヴアルのガーディアンも加勢に来たいたが、それでも人数の上では十倍以上だった。

絶妙のコンビネーションでローゼアールヴアルのガーディアン達に対応する。

一人が魔法を詠唱に入ると一人が援護し陽動を仕掛け時間を稼ぐ。一人が敵の懷に飛び込むと魔法の使い手が援護の魔法を放つ。依頼で隊を組む事が、多いガーディアンの息はぴったりと合う。互いの特徴を生かし近、中、遠距離戦闘を使い分けている。

傭兵達の戦歴は多いが所詮無法者の集まり戦時には王軍の指揮官の下で動くが、ギルド内でその指揮能力を発揮する者がいなければ統率が取れなく単騎の寄せ集めに過ぎなかった。

「マイクロエーブショット」

セインが大剣を薄刃の片刃の刀身で難なく切り落とすと当て身で倒す。

アイスマンが氷の魔法を矢に乗せ放つと敵の周囲で炸裂し氷の礫となり敵の陣を乱した。

近付く敵は弓で薙ぎ払った。

「ごめん、ちょっと切れちゃったね」

アイスマンが薄い笑みを浮かべた。

アイスマンの弓には持ち手の上下に前向きに刃が付いている。

レイグは魔法と剣で敵を翻弄する。

「俺は貴殿を切れるかな？」

薄笑みを浮かべたコバカムが言い放った。

側にいたアイスマンは思った。「間違ってる……お前」突っ込むのも馬鹿らしいので何も言わなかった。

その中で自分の本来の力を出せずに苛立つ者がいた。

ミルだった。

「ああ！ もう——面倒ねえ！」

傍でミルの援護を受けながら戦うセインが言った。

「仕方ないしょ。マスターは身柄の拘束を優先と言ってたし極力殺すなどの指示が出てんだからさ」

「あんた達、よくストレス溜まらないのねえ。こんな戦闘の仕方でもミルが詰まらなそうに言った。」

「ミルがあんなもん達呼び出された日にや、皆あの世往きだからな……敵も見方も」

ここに来る前に、こなした依頼が脳裏に甦るとセインの背中に冷たいものが走る。

S級ランクの依頼になれば魔物等を相手に殲滅する。

ミルは自分が契約を交わした聖獣等を異界から呼び出し戦うサモンサーモナーだが、自分が倒した強力な魔獣をそのまま殺さず魔獣と契約を交わし自分の力として使う。

普通はそんな事しないというか、危険過ぎて誰もやらないのだが、ミルは難なくを行なってしまう。

「あんた達、これからが本命の登場よ」

戦場の地点より離れた場所で魔法の準備を整え控えていた敵のハイメイジが魔法の射程に入らんとしていた。

ガーディアン達の魔力と体力の消耗を待っていた。

ハイメイジ達が余裕を見せ呪文の詠唱に入る。

慌てる事はない。

消耗し切った近距離戦が得意なガーディアン達を間合いに入れても十分対応できる。

魔法も魔力の消費が大きいガーディアンにはなす術がない。

しかし、ガーディアン達は皆臆する事無く向って行く。

ハイメイジ達の長い呪文の詠唱が終わると杖を振り下ろし魔法を解き放った。

「我は求む。時空の扉を開き来たれ、全てを喰らい尽くす者よ。主の召喚に応えよ」

ミルの詠唱が、ほぼ同時に終わると空に黒い渦が現れ、その中におぞましい異形の姿をした大きな口が現れ、黒い渦から飛び出してミル以外の者に襲い掛かった。

「ソウル・イーター」

その口の化け物が、ハイメイジ達の放った魔法の魔力と術者達の魔力を喰らい奪い取って行く。

化け物は敵味方の区別なく魔力と体力を喰らい取る。

放たれた魔法が消滅するとミルは時空の扉を閉めた。

ハイメイジ達は魔力と体力を喰らい取られ一気に消耗していた。

そこに接近戦を得意とするガーディアン達が飛び込むが、こちらの体力も同時に喰らい尽くされた為、その場に膝を着いた。

「剣に宿りし炎の化身よ。その力、今、解き放て」

レイグが己の剣を解き放った。

炎の魔剣。

フレイムソードが猛り狂う不死鳥の炎と化し大剣を纏う。

猛り狂う炎を目の当たりにしたハイメイジ達は戦意を亡くした。

接近戦で専門家の剣士や拳士に適う筈がない。

「ほら、さつさと確保するわよ」

ミルが言った。周りの者も消耗し切っている。

「だから嫌だったんだ。ミルの魔法は！ ソウル・イーターでなんだ。その悪い魔法の名は」

セインが疲れ果てた声で言った。

「あらそう？ ごめんなさいね。大分加減はしたのよ」

ミルが楽しげに妖艶な笑みを浮かべた。

「仲間の魔力まで奪うか？ 普通……」

「ちょ……、駄は、まだ完璧に出来てないのよ」

ミルは小悪魔的な笑みを漏らした。

「おい！ 今、調教て言いそうになったろ？」

「だったらどうなの？ あなたにもしてあげるわ」

目を細めてセインを睨んだ。

「結構です」

セインが恐縮して言った。

「でも未完成にしては上出来ね。何人が魂喰われると思ったけど…無事みたいだしまあいいか」

ミルが笑った。

「「そんな魔法使うな！」」全員が声を揃え言った。

暫らくすると王軍の兵士達が現れ身柄の確保に入った。

「後はシオンね」

ミルが呟いた。

「いやあ——」

冷たいギルドの一室アイナの悲鳴が響いた。

アイナの着衣に手が掛かった時、アイナは魔法を使った。

「風の精霊よ。我を纏い壁となれ」

アイナの周囲に空気の壁が出来上がる。

男は空気が膨張する様に膨らむと後ろに跳ね飛ばされた。

アイナに眠りの魔法を掛けた男が呟いた。

「道具を使わずに魔法を行使するとは精霊魔法か？ 人間で使える者はそういない筈。しかし、素人か……、戦闘には慣れえてない様だ」

他の男達は楽しみが、消えた苛立ちにを見せていた。

一人の男がアイナの魔法をデスベルしようとすると男が言った。

「止めておけ、お前達ではその精霊魔法は解除無理だ^{デスベル}」

「お前は出来るのかい？ 出来るなら解除しろ」

「出来ない事もないが、魔力を使う事になる」
「ケチるなよ」

一人の男が詰まらなそうに鼻を鳴らして言った。

「そのまままっついていれば、その内消える。眠りの魔法と違い。魔方阵無しで空気の壁を張り続ける事は地獄の苦しみ。魔力を放出し続けているという事だ。瞬間的に出すのと違いかなりの精神力を使う。そうは持つまい」

仕方なく待つ事にした様だった。

『シオン、助けて』アイナが心の中で呟いた。
男の言う通りそう長くは持たない。

盗賊紛いの傭兵達に汚されてたまるか、アイナは精神が途切れそうになりながら耐えた。

まだ大好きなシオンにも見せた事がない肢体をさせない。
その思いだけで魔力を放出し続ける地獄の苦しみの中のアイナを支えていた。

シオンがタイターン・ノーズの砦の鈍重な扉の前に着くと、姿を戻しているリーシャが経緯を説明した。

扉は押しても引いたも開かない。
「くそ」

シオンが短く怒りの声を上げた。

魔法では幾重にも結界魔法を施された結界を解除出来ないのはリーシャから聞いて先刻承知している。

「シオン！ ゴーレム」リーシャが言うと言って続けた。

「派手な進入方法は避けたいけど、シオンのゴーレムなら扉を壊せるかも」

「お前、鬼神の姿をとったんなら何で壊しておかなかったんだ」

「時間切れ」

「あそ」

待ち伏せ罠は承知の上だが、出来れば静かに入り不意をつきたい。しかし、時間がない。

「ああ、直ぐ呼んでくれ」

「はいー！ 遺跡と魔方阵で空間を繋ぐね」

リーシャが魔方阵を描き出した。

「ちょい待ち！ 俺の話を聞いてなかったのか？ 俺の体当りやブレスでもびくともしないんだぞ」

眷属の竜が言った。

眷属を含め普通のブレスは火炎を放射するブレスだ。

「聞いてたよ」

リーシャが呟いた。

暫くして甲高い音が空に響いた。

「来たよシオン」

「武装は使えそうだったろうな」

「勿論、シオンの言われた様に確かめて装備を変えておいたよ」

「要塞攻略装備。完璧だリーシャ」

「あんがと& a m p ; # 9 8 2 5 ; ;」

シオンはAMRSに乗り込むと貫通弾をセレクトしバズーカのトリガーを引いた。

「いっけえ——！」

重厚な岩の扉をいとも簡単に貫通し扉は轟音と共に崩れ落ちた。

「シオンやり過ぎー」

「なあ——に、軽いノック代わりさ」

「アイナ」

直ぐ助けてやるシオンの怒りが満ちていく。

扉の向うには薄気味悪い空気が漂っていた。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 〵 第十二話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―） <

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第十四話

† G A T E - 1 4 目覚めるちから

薄暗い中、岩肌に露が浮かび、僅かな光に反射し光沢のある漆黒の異様な空間を作り出している。

「僅かだけど、精霊の振動を感じる……岩の影響で乱反射して分かり難いけど、この魔力はあの娘のものだよ、シオン」

リーシャが、一早くアイナの精霊魔法に気付いた。

「もしかすると俺の妹も精霊の振動に気付いてるかも知れない」
共に来た竜も振動を感じている様だった。

「そうだ！ きみの精霊魔法を唱えてみなよ」

リーシャが言と眷属の竜は精霊魔法を唱え出す。

「水と風の精霊よ我に流れしものを変え包め」

眷属の竜は暗い砦の中で夜目の利く、フクロウの姿に変える。

暫らくすると違う質の魔力が違う方向から乱反射し返ってきた事が感じ取れた。

二手に分かれようと眷属の竜は言ったが、リーシャが止めた。

「二人とも急ぎたい気持ちは分かるよ。ここまで罫もなかったけど、この砦の中は迷路の様な構造みたいだし、この先何があるか分からないんだよ？ 戦力の分散は危険が増えるだけ。それにきみの妹は、どれ位の大きさだい？」

「体長五・六メートル程だ」

「それなら大きな通路沿いの場所に幽閉されてるんじゃない？ そ
っちから探そうよ」

「アイナが危険なんだぞ！ 急げったのは、お前だリーシャ」
シオンは苛立ちの満ちた声で怒鳴った。

「もうー怒らないでよシオン！ 竜さん？ ここの構造は分かん
ないの？」

「良くは知らない。森の木々で隠れてはいるが、高い空から見ると
歪な円に型になっている。中心部は中庭の様になっていて中央に砦
と繋がった岩山をくり貫いて作ったギルドの建造物がある。それが
本部だろう。たぶん出入り口は隠し通路になっている」

「なんとかならねえのか」
シオンが苛立つた声を上げる。

「戦闘になれば、この狭い通路じゃ体の大きな竜は身動きが取れな
い。何とか中庭に奴等を燦り出す事が出来ないかな？」

「リーシャのゴーレムも俺のAMRSも、この砦の中では使えな
い。まだ不完全だが、魔法の力に頼るしかない」

仮に人質の位置を完全に把握したとして一旦外に置いてきたAM
RSまで戻り貫通弾で周りの壁を壊しながらAMRSが、通れる空
間を確保し人質まで辿りつく事は危険過ぎる。

無暗に探しても通路は迷路状になって下手をすれば自分達の居場
所も把握出来なくなる。

此処まで岩肌に竜が鋭い爪で目印を付けては来てるが、何度も行き来す事になれば、時間を失うだけ、何よりアイナの残りの魔力が心配になってくる。

（くそ！ 俺は何時も何もできねえ）

ガーディアンになって少しは強くなったと思っていたが、肝心な時には何も出来ないじゃないか。

（あれ？ 今、アイナの魔力の感覚が消えた）

アイナの魔力が消えた事を感じ心乱した瞬間、シオンの“眠れるちから”が目覚め始め、一気に弾けた。

「シオン？」

リーシャがシオンの変化を敏感に感じ取った。

「大気に満ちる風の精霊達よ集え 大地に宿りし地の精霊よ眼を覚ませ 汝らに命ずる。古の盟約に従い我が要求に応え 我が力となせ 破壊は塵に光は守護に」

シオンの唱える精霊魔法の言霊が青白く光だしシオンの周りを球状に取り巻いた。

その周りの岩肌の言霊が触れる部分は丸く削られていた。それに伴い大気と大地に振動が起こり辺りを揺るがした。

リーシャと眷属の竜の周りに光の硬膜が現れる。

「詠唱の具象化なんて始めて見るよ！ 長生きはするものだね？」

シオン最高！」

歡喜に満ちたリーシャが嬉しそうに言った。

「随分、頑張った様だが、そろそろ限界の様だな」

男達の凶悪な笑みがアイナの目に映る。

アイナは最後の魔力を絞り出す様に苦しそうな表情を浮かべた。
「お前達なんぞに指一本触れさせんですう」

アイナの瞳が男達を鋭く睨みつける。

——しかし、その時は来た。

男達が囲む中、アイナの魔力がついに尽きた。

「はああああ……来るなでう……いやあ——！」

男の手がアイナに伸び、布を引き裂く音が砦の中に響き渡った。
男達の手の中で引き裂かれた着衣の一部が揺れていた。

アイナが最後の力を振り絞り抵抗をした為、僅かに破かれただけだった。

しかし、再び男の手が伸びアイナに触れ様とした時、大地の異変が起こった。

それに伴いアイナの周りに光の硬膜が現れアイナを包み込んだ。

アイナは、その光の硬膜に感じる魔力に覚えがあった。

「シオン……来てくれえ……」

その先は言葉に出来ず気を失った。

砦の中は、その振動で天井の岩は、ぼろぼろ崩れ始める。

砦の中からタイターン・ノーズの傭兵達はアイナを置き去りにし

て、我先にと中庭に逃げ出した。

「お前は大切な切り札だ」

眠りの魔法を掛けた男が言うと光の硬膜に包まれたアイナに移動の呪文を唱え外に運び出した。

「なに？ この地響きと大気の振動……」

森の入り口で傭兵の身柄をを拘束していたミルが異変を感じた。振動は一定の間隔を維持し続けている。

シオンが魔法を完全解放せずにいるのは傭兵達が逃げ出す時間を与える為だ。

——皆から全員燦り出す為に。

「地震じゃない？」

セインが振動に驚きながらも冷静な口ぶりと言った。

「地震に決まってるじゃないかね」

コバカムが戦慄きながら震えた声で喚いた。

「そう願いたいわね」

ミルの顔が厳しい面持ちになっている。

「そうだな」

レイグも同じ思いの様だった。

「なんだあ？ この地震に何かあるのか？」
セインが何故だか分からない様子で言う。

その振動と大気の振るえは、かなり長い時間続いて魔力を感じるのも確かだ。

「セインは魔法に疎いからね」

アイスマンが説明を始める。

「地震にしては揺れが、一定していて長い、大地の振動と大気の震えとのレベルが違い過ぎる」

「そうね。この揺れ程度の地震では、ここまで大気に震えを与える程の揺れじゃないのよ」

ミルが訝しげに言う。レイグが後を引き取った。

「この感じ……どうだか分かんが、魔力を感じないか？ ミル」

「そうね……余りにも大き過ぎて魔力か、どうかさえ怪しいわ」
ミルが険しい顔をした。

「奴らの継続魔法なんかじゃないのか？」
セインがその可能性を聞いた。

「それなら近寄らなければ発動しない筈だわ」

「シオンが先に入ってから時間が絶ち過ぎてる」

レイグが言いアイスマンが続く。

「これ程、魔力を放出している継続魔法の罠を張れば、自分達のアジト諸共、崩壊するだろうね」

「自分達は防御の結界魔法施したんだよ」

コバカムが自信に満ちて言った。

「これだから魔法えお知らない奴は使えないわ」

ミルが言い続ける。

「これだけの威力がある魔法を仕掛けたら、どれだけの防御結界を張らなければならないと思ってんの？ その威力の二条に比例する魔法陣を施す必要があるの、それを施す為にどれだけの魔力と手間と何年、掛かると思ってたんの？」

「そうだな、エルフか或いは、何かの化け物の一個小隊でも見方につけているのか」

レイグの顔に珍しく焦りの色が見える。

「そうだとしたら宜しくないわね」

ミルにも焦りの色が見える。

「はあ——、エルフか……、でもシオンが行ってるんだ俺達が行ってやんねえとな」

セインが溜め息交じりの声に笑みを浮かべた。

今の自分達に魔力も体力も無いに等。

「そうだな」

「そうね」

「そうだね」

皆が口々に言った。

「言っておくが僕は魔法を使えるぞ」

ミルに使えない扱いされたコバカムが怒鳴った。

今更ながら可哀想なコバカムだ。

皆が森に入った所で振動と大気の震えが爆発的に大きくなり全員

が這い蹲る様に地面に伏した。

「一体！ 何が起てるとゆうの？」

「アトモスファイア エクスプロジオン」

シオンは魔法を完全に解き放った。

タイターンノーズのアジトの岩山はシオンが魔法を解き放つと轟音と共に崩れ去った。

周囲の地面には無数の亀裂が走っている。

中庭に逃げ延びた者、瓦礫の下敷きになった者、シオンの光の硬膜に護られている者が辺りにいた。

「兄さん！」

体長五・六メートルの竜の幼生が声を発した。

「無事だったか」

眷属の竜が傍まで近づき言葉を掛けた。

「今のなに？」

竜の幼生が尋ねるが「さあな」と眷属の竜が短く答えた。

眷属の自分が、これまでに感じた事の無い程の魔力。

それに見た事のないゴーレムを操り鬼神の妖精を伴っている人間の少年は一体何者だと考える。

エルフかとも思い耳を見るが尖ってない。

「あの少年は一体何者だ」思わず呟くと「シオン」リーシャが嬉しそうな声で答えた。

「シオン？ それは何だ。それにお前は一体何者なんだ」

「あの子は「シオン」ただの人間。そして私は“リーシャ”何れシオンを導く者！ シオンの妹、それ以上でもそれ以下でないよ」
リーシャは嬉しそうに頬を綻ばせた。

中庭に数名の人が蠢いているのが見える。

そこまでの距離は魔法を行使し移動するにも自分で移動するにしても中途半端な距離だった。

魔力は温存しておきたい。力が覚醒しているシオンといえ、強力な魔法を続け様に放てない。

シオンはリーシャに声を掛けAMRSを中庭に急ぎ移動する様頼んだ。

中庭に近付くとアイナの姿がシオンの目に映った。

矢、投槍、魔法がシオンに向かい飛んでくる。

それらの得物は、シオン等に助けられた二匹の竜がプレスで遮った。

「ありがとな」

「なァーに、お前には返せぬ程の借りが出来た」

着衣に乱れがある事に気付きリーシャの言葉を思い出したシオンの怒りが頂点に達する。

「お前等は潰す！」

シオンが咆哮を上げると身体が本来の動きを思い出したかの様に動き次々と傭兵を倒していく。

そこに二匹の竜が加わる。

「破壊を司る火の精霊 流れを司る風の精霊よ 古の盟約により我

の力となし仇なす者を焼き払え」

精霊魔法その魔法の魔力と呪文詠唱の長さ具体性からして強力な魔法だ。

「いけない！」

竜がシオンに叫んだ。

「風の理・吹き・流れ・集い・槌と成し現となせ」

「アックスウインド」

シオンは、打撃を傭兵に与えた後、別の傭兵に向け四大系統の風系統魔法を放った瞬間だった。

周囲には上昇気流を起こしながら、猛る炎の竜巻がシオンに襲い掛かる。

男の被っていたロープのフードが捲れその中から、尖った耳が現れた。

瓦礫と化した砦の上空をのんびり流れる雲が、その戦いの行く末を静かに見守っていた。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 漆黒の守護者 〵 第十四話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第十五話

† G A T E - 1 5 死闘

崩壊音は消え、静寂が戻った。戦場と化した森と瓦礫の岩山の上に雲が足早に流れている。

その一角に静寂の空を掻き乱す炎の竜巻が、シオンを呑み込もうとしていた。

シオンが魔法を解き放った、一瞬の隙を見計らい放たれシオンは、それに対応する魔法を放てない。

他の傭兵達の中には崩壊に巻き込まれず戦える者もいた。

シオンは、その時一人の傭兵接近戦をおこなっている最中で逃げる体勢が整わない。

振り返ると凄まじい炎の竜巻が襲い掛かったきていた。それに反応しすぐさま回避を試みるが体勢も不十分な状態では交し切れる大きさではなかった。

この魔法を相殺するには、陳腐な詠唱破棄の魔法を行使しても掻き消せる威力のものではない。

それでもアイナがいる以上、諦める訳には行かない。

次の魔法を放てるまでの短い時間が、永遠にも思える程に長く感じる。

「くそ！ かわし切れねえ」

シオンが感じた瞬間。

柔らかい何かにぶつかった。

その魔法に一早く気付いた竜がシオンの後ろから魔法を放ちシオ

ンと自分の間に空気の壁を作ったのだ。

竜のブレスなら、炎の竜巻を相殺する事が出来るかも知れないが、精霊魔法で操らせた炎にブレスの炎をぶつけても炎の精霊が支配する魔法の炎に呑み込まれブレスの炎まで制御される危険も孕んでいる。

仮に使い手が契約している精霊達の制御を上回るブレスの炎を吐いたとしても回転を加えられた炎の壁に弾かれるかも知れない。

魔法を放つにも相殺できる程の魔法詠唱の時間も無かった。

「リーシャ！まだか！」

シオンがリーシャを急かせた。

「もうちょっと……だよお」

リーシャが答えた。

「出来た！来るよ！」

リーシャの描いた大きな魔法陣から人の頭のような物が現れ続いて肩、胸、腰と地面から現れてきた。

胸の辺りのハッチはシオンが砦の外で降りた時の状態で開いたままになっていた。

シオンは操縦席まで膝まずいて屈むAMRSの腕を駆け上り操縦席のシートに収まりハッチを閉じた。

「APU起動、モーメント制御を重力下に変更、加速器及び圧縮器正常、各種パラメータ正常値、融合炉爆縮率七十八パーセント正常

に圧力上昇中、ロックオンゲージマニュアルで機動、融合炉臨界！
Hound、行ける」

直後、AMRSを炎の竜巻が飲み込んだ。

「……ゴーレム？ 見た事のない形だな」

耳の尖った男が放った魔法の炎の中に風変りなゴーレムの姿が目に映し出された。

「何だ。あれは」

その言葉を見殺したリーシャが口を開いた。

「エルフね？」

「混じり物のハーフェルフ」

「わたしはリーシャ。ゴーレムを操ってるのはシオン」
リーシャが名乗るとハーフェルフも名乗った。

「名は傭兵ギルド、ウインドー・ナイトのギリアム」
「きみの魔力は半端じゃない。でもシオンはもっと半端じゃないよ。きつと」

リーシャが続ける。

「でも、ハーフェルフの強者にしては、おしゃべりさんだね。前は隙を突いたのに今は隙だらけ」

「何だと」

ギリアムが精霊の振動に気付く。

「大地を司る地の精霊よ 古の盟約により 炎と化し地より来たり
て 我が力となし仇名すものを焼き払え」

AMRSのハッチを開け飛び出したシオンが魔法を放った。

「しまった！ 自らの魔法で精霊の震動が余韻に紛れていたとはいえ、貴様の精霊の振動に気付かないとは不覚を取った」

リーシャが話し掛けていたのは、シオンが魔法を完成させるまでの時間稼ぎ、遺跡で見つけた整備不足のA R M Sは扉をぶち抜いた後、戦闘に耐えうる程の動きをできなくなっていた。

ギリアムの足元に亀裂が走り炎が立ち昇るが、ギリアムも大きな魔法を放ったばかりだ。

それをかわしつつギリアムが口上を述べた。

「逆巻け水流 渦の花を咲かせ 水竜と化せ」

ギリアムが手に持っていた長槍を天に掲げた。

長槍から水の竜が進ると立ち昇る炎を打ち消していく。

「水竜の槍」

リーシャが呟いた。

「なにあれ？」

シオンがリーシャに尋ねた。

「稀に武器や防具に精霊等が宿るんだよ。アービィの小人象の武器版みたいなも」

間を取り体勢を立て直したギリアムが口を開いた。

「シオンとか言ったな。貴様の魔力普通の人間が持てるものではない。貴様も混じり者か？」

剣を構えシオンが、アイナの倒れている方向をチラッと見た。

「知るかよ。俺は「シオン」あいつに貰った、この世で唯一俺を示

すものだ」

シオンがギリアムに切り掛かる。
ギリアムが槍の柄で受け止めた。

「風の理 大気 流れ 偏在 天に起こり降りて刃と化し現となる」
「ウインドウブレイド」

シオンが剣に乗せた風の魔法が槍の柄をすり抜けギリアムを襲う。

「風よ 盾となれ」

ギリアムが咄嗟に魔法を唱え、空気の盾を張りシオンとの距離を取りながら魔法の詠唱に入る。

「大気に潜む水の精霊よ 汝、盟約を果たせ 氷の矢となれ」

詠唱が終わると空気中の水蒸気が固まり氷の矢と化し数十本の氷の矢がシオンに襲い掛かった。

「地の精霊よ 汝、古の盟約を果たせ 礫と化し我に仇名すものを討て」

シオンの魔法で砦の瓦礫が石礫となり氷の矢を迎撃し砕く。

互方の攻撃と防御が繰り返される。

魔槍を持ちエルフの血を引き、その魔力も強大で戦闘に慣れたギリアムと失われた記憶と体内に眠る

“幾多の戦闘”の片鱗を見せるシオンだったが、不慣れな魔法戦にシオンが徐々に押され始める。

シオンの身体が徐々に削られ傷ついていく。

「シオン！ 大丈夫？」

リーシャが不安げに戦況を見詰めていた。

「なんとかな、あいつ……アイナは俺が助ける」

シオンの口元が僅かに笑みを浮かべ吊り上げた。

「最高よお。シオン！」

「とはいえ、次の魔法で決めねえと、接近戦はあの槍が厄介だ」

通常懐に入れば間合いの長い槍は不利。

相手も相当の使い手で戦いを良く知っていて、なかなかシオンの間合いにさせてくれない。

シオンは何度が素早さを生かし懐に入るものの、魔槍の水竜がシオンを押し戻す。

そうしてる間にシオンの動きも衰えてくる。

「舐めてるのか？ 竜達の力を借りたらどうだ」

「いらねえ……あいつは俺が守りたいんだ。俺の手で！」

「下らん意地を張っていると死ぬぞ」

「下らない意地かも知れねえ。俺は多くを護りたいと言ねえ。でもな、せめて身近な仲間や大切な人を護りてえ！ 惚れた女一人、自分で護れねえ様で何が護れるてんだ」

シオンの目には力が漲っている。

「あんたはどうして戦ってる？ ウィンドー・ナイツとかのギルドらしいが人質を使う様な奴らのか？」

「好むと好まざるを問わず。ギルドが請けマスターから渡された依頼だからだ。人質を使うやり方は私も好まない、依頼主の意向だ仕方あるまい。貴様もガーディアンなら解るだろ」

二人は間合いを詰め互いの得物を交えては、また離れる。

ギリアムもかなりの魔力をここまでの戦いで消費している。そう強力な魔法は放てない。

「大気に潜む水の精霊よ 汝、古の盟約を果たせ 氷の矢となし我の力となれ」

シオンが間合いを取る際、ギリアムは魔法を放った。前より数は少ないが数本の氷の矢は先程と違い槍程の大きさがある。

咄嗟にシオンも魔法を放った。

「地の精霊よ 汝、古の盟約を果たせ 礫と化し我に仇名すものを討て」

石礫が迎撃する……砕けない。

「甘いな」

ギリアムがシオンに槍を突きたてた

「終わりだ」

シオンは氷の槍をかわしたが矛先はかわし切れず脇腹に刃が食い込むのを感じた。

シオンの口から吐血が流れ落ちる。

「見事だ。あの体勢で急所を外し咄嗟に剣を捨て両手で柄を掴み勢いも殺したか」

シオンの身体は地面に崩れ落ちた。

「シオン！」

リーシャがシオンに近付こうとした時、数人の傭兵が近づいてきた。

「止めを刺せ」

タイターン・ノーズのギルドマスター、マルガスが気を失い倒れているアイナを抱え起こした。

アイナの目がゆっくりと開かれていく。まだぼんやりする視界に血だらけで地面に伏しているシオンの姿が飛び込んだ。

「シオン——！」

アイナが叫んだ。

オッドアイの瞳からは大粒の涙が零れ落ちた。

アイナが掴まれた身体を荒がせ、逃れシオンの下に駆け様とするが逃れる事が出来ない。

「離せ！離しやがれですう！」

二匹の竜が臨戦態勢に入ると傭兵がアイナに剣を突き立てる。

これでは強力な眷属の竜も手出しが出来ない。

「混じりもの早く止めを刺せ」

マルガスが言うどギリウムが答えた。

「依頼に殺しは入ってない。私はお前達の言う様に、その眷属の竜とその娘を捕まえた。依頼は終えている」

「追加だ」

マルガスがほくそ笑む。

「断る。放って置いてもその内、息絶える」

「言っ通りにしていればいいんだ。混じりもの」
傭兵の一人が言った。

「これだけの使い手とやり合ってやったんだ。この件はサービスにしといてやる」

「アイナ……を、はな……せ……」
シオンが言葉を搾り出した。

ギリアムがマルガスの下に向うとマルガスが顎をしゃくり上げ部下の傭兵に合図を送る。

傭兵がギリアムを捕えて言った。

「お前もあれだけ魔法を使って消耗し切ってる。その槍も」

「ここからは俺達のやり方でやるだけさ。いや、これまでもと言う方が正しいか」

マルガスがほくそ笑み言葉を続けた。

「お前を指名したのはローゼアルヴアルとの交渉なんかじゃないのさ。叩き潰す為にエルフの血を引くお前の力が必要だった。これまでと言うなら消耗したお前を殺すまでだ」

「次はウィンドー・ナイツを敵に回すだけだ」

「お前のマスターには戦死と報告しといてやる」

「分かった」

ギリアムが傭兵を振り解きマルガスに向い歩み寄った。

「向う方向が違うだろ？ それ以上近付くな」

マルガスが暴れるアイナの上着の中に剣を潜り込ませ一気に切り裂いた。

「いやあ——」

天を裂く様なアイナの悲鳴が響いた。

「娘の綺麗な肌に傷が付くぞ」

「人質等、私には関係のない事だが、あの少年は違う」

シオンが静かに立ち上がるとシオンの内に怒りと魔力が再び、うねり狂い出す。

その目には怒りが満ちている。

あの少年は何処からあれだけの魔力を引き出しているのか？ 自分との戦いで消耗著しかった筈だ。

一度、消耗した魔力を短時間で取り戻す事等、ハイエルフでも出来ない芸当だ。

（あの少年は一体何者？ それにこの魔力の大きさは、なんだ）

ギリアムは困惑した。

怒りは天をも焦がす程の凄まじく、それに呼応してかのように空には雷雲が広がり出した。

To Be Continued

ゝ 漆黒の守護者 〵 第十五話（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回の更新もお楽しみに！

く 漆黒の守護者 く 第十六話（終幕話）

† G A T E - 1 6 漆黒の守護者

青空に雷雲が蔓延り漆黒の空と化していた。

シオンの怒りに呼応した様に、その凄まじい程の魔力は天候をも変えた。

アイナは悲鳴を上げた後、再び気を失っている。

「アイナ」

シオンが短く呟くと呪文の詠唱に入る。

周りに呪文の言霊が具象化して白金色の光が球状に取り巻いた。

「大いなる冥界の守護者よ 汝、古き血の契約を果たせ」

既にギリウムとの戦闘で消耗しているシオンの底知れぬ程の力に先程まで戦っていたギリウムは驚きを隠せないでいた。

「シオン……、何処からそんな魔力を引き出してるの？ 私の力を与えたと言っても魔法の理と人の常識を超えてるよ」

「あの少年は一体何者なんだ。あの大地の振動も大気の震えもあの少年の魔法だったのか」

魔力の大きさは感じていた。

ギリウムが驚愕に満ちる表情を浮かべた。

「これ程の魔力……ハイエルフ並みか……いやそれ以上かも知れない」

眷属の竜も驚愕の余り言った。

「プロテクタト ガーディアン」

怒りに満ちる中、シオンが静かに魔法を放った。

魔法を解き放つと光が湖面に広がる波紋の様に敵味方問わず周囲の全ての生ある者を包み込んだ。

「なんだあ？ 地震の後は雷雲かよ」

セインが溜息を吐く。

「まったく今日はなんて日なんだ」

コバカムもほとほと疲れた口調で言った。

天候の変化が魔力によるものだと感じた者はミルだけだった。

「これ……魔力によるものよ。次空の門が開いたのを感じるわ」

異次元から魔物等を召喚するサモンサーモナーのミルだからこそ分かるものなのだった。

「これだけの魔力なんて考えられないな。少なくとも人の常識を越えている」

レイグは感嘆と驚愕を隠せなかった。

その巨大過ぎる魔力に誰もが驚くしかなかった。

それがシオンに秘められていた本来の魔力だとは誰も気付きもしなかった。

「やっぱり引き返す？」

セインが苦笑いを浮かべた。

「そうね。ますます敵の正体が解らなくなってきたわ」

ミルも苦笑を浮かべた。

「俺は行くぜ」

レイグは得体の知れないものの方へと歩き出した。

「レイグは恐ろしくないのかい？」

アイスマン尋ねる」。

「恐ろしいさ。相手は得体の知れない化け物だからな。だが、シオンが居る。仲間を見捨てる位なら死んだ方がましさ」

レイグは静かな笑みを浮かべ再び歩き出した時、光に一同は包まれた。

——まるで母に抱かれる様に優しく温かな光に。

シオンが魔法を解き放つと次の呪文の詠唱に入る。光沢のある漆黒言霊の光がシオンの身体を取り巻いていく。

「九つの冥界より来たれ漆黒の業火 汝、古き血の契約に従い我の呼び掛けに応えよ 汝、我が魂を糧とし力を行使せよ。漆黒の炎となり敵を焼き尽くせ」

「ダークネス フラム」

シオンが魔法を解き放つ。

シオンを中心に辺り一面が漆黒の爆炎に飲み込まれて行った。魔法の効果が終わると辺りには何の変化も見当たらなかった。その魔力を目の当たりにしたタイターン・ノーズの傭兵達は呆け戦慄で震えてる。

「漆黒の守護者」
ガーディアン

マルガスが呆然として呟きシオンを見ている。

シオンはローブを脱ぎアイナの傍に来ると割れ物を扱う様に優しく掛け「ごめんな」と呟いた。

その場の者全てが呆ける様に、ただシオンを見ていた。

リーシャがシオンの状態に気付くと素早く癒しの魔法を唱える。

「癒しを司る水の精霊よ 辺りを取り巻く風の精霊よ 汝、古の盟約を果たせ 我が意思に応え彼の者を癒せ」

「俺達も手伝う」

眷属の竜とその妹がシオンの傍に来ると言った。

「私も手伝う」

ギリアムがそう言うときリーシャが言った。

「シオンは私が診る。きみは傭兵を捕えて」

「分かった」

拘束を終えたギリアムは手伝い始める治癒の魔法は攻撃系の魔法より繊細な精神力を必要とする。

シオンとの戦いの後、ハーフエルフのギリアムの消耗も激しかった。

途切れそうな意識の中で治癒の魔法を続けていた。
その様子にリーシャが気付いた。

「きみは休んで」

「大丈夫だ。続けさせてくれ」

「だめ。きみの面倒まで見れないよ。それに何れ、また敵となるかも知れないし」

「すまない……では休ませて貰うが出来る事なら敵として、お前達の前には現れたくないものだ」

ギリアムが隣で気を失っているアイナの方を見て呟いた。

「この娘の瞳の奥に何故か懐かしいものを感じるんだ」

「そう？ きみが何時『アカデメイアの森』を出たのか知らないけど。恐らくその娘……何かの血を引いている」

リーシャが答えた。

シオンの目蓋がゆっくりと開いた。

「大丈夫？ シオン」

「俺は死んだのか？ あれ、リーシャまでやられたのか？」
シオンが意識朦朧として言った。

「なあにー言ってるの」

「俺……生きてるのか？ あいつは！ アイナは無事か？」
リーシャが小さな手でアイナの方を指した。

シオンの目にはアイナと共にギリアムが映った。

「てめええ！ アイナに手出すな」

「もう済んだよ。シオン？ 彼は治癒を手伝ってくれたんだよ」

ギリアムはこの場に近付いてきている者達の気配に気付いた。
「誰か来る……私は消えるでしょう」

ギリアムが操るで聖獣を呼んだ。

前部が巨大な大鷲の前脚に様な翼を持ち胸部から後半身が馬の姿をしたヒポグリフが舞い降りた。

「一つだけ聞きたい事があるがいいか」

「俺にはラナ・ラウルに着てからの記憶しかねえ」

「何故、俺を傭兵達を殺さなかった。あの魔法なら容易く出来たろうに」

「依頼だ。殺さず捕獲しろだ。そうだ」

シオンは口を尖らせ不機嫌そうに言った。

「それだけではあるまい。敵の身柄を拘束する事は殺すより遙に難しく困難だ。それに大切な者をさらわれ怒りを露わにしていたお前だ」

「……こいつはそういうの嫌いなんだよ！ 悲しむ顔は見たくない」
シオンは逸らした顔が少し赤く染まっている。

「お前とは何れ、また会いたいものだな。漆黒の守護者」
ギリアムが去り暫らくするとギルドの仲間達と王軍が戦場に着いた。

「シオン無事かあ」

セインがまだ横たわるシオンに声を掛けた。

「なんとかな」

シオンが短く答えた。

「どうなってるんだ。光の波が来たと思ったら次は黒い炎だ。おま

けに岩山は崩れて無くなってるしシオン？　よく無事だったね」
アイスマンが声を掛けた。

「うわぁ！」

コバカムの驚きの声が上がた。

シオンの事で何気なく通り過ぎて来たがコバカムは背後からシオンに近付いてくる二匹の竜に気付くと気絶した。

一瞬、皆に緊張が走ったがリーシャが事の運びを説明した。
黒こげになっているAMRSの事はゴーレムと説明したが……。

「あの光の波紋も黒い炎もシオンの魔法で訳か」
セインがシオンを見て言った。

「まったく！　こいつには驚かされるばかりだ」
レイグが驚きと疑問の言葉を述べた。

他のガーディアン達も同じ想いだったが、詮索した所で解る筈もないしシオンが記憶喪失者である事も知っている。本人に来たとしても解るまいと思うのだった。

「さあさあ、みんな引き上げよう！」
リーシャが皆を促すと小さくした身体でパタパタ飛び立った。

「そうねえ、疲れちゃったわ。今日は大仕事だったしギルドの酒場で朝まで飲むわよ皆！」

ミルがそそくさと歩き出すと皆も後に続いて帰りだした。

「俺は置いてきぼりかよ」

シオンが言うが、皆はもう聞いてもいない様子だった。

「白状者——」

シオンの声が響き渡った。

ミルが振り返りもせず右手を上げて左右に振りバイバイをする様に手を振って言った。

「あんたはその子と少し休んでから来なさい！ 報告はしといてあげる。それと気を利かしてあげてるんだから今夜の酒代はあんた持ちね& amp;#9825;」

シオンとアイナ、二匹の竜が残っていた。

眷属の竜が口を開くとシオンに言った。

「お前には随分と世話になった。この恩は忘れまい俺達の力が必要ならその時はどんな時でもそれに応えよう」

そう言う喉の中から角笛を吐き出した。

「俺達の力が必要になったら角笛で何時でも呼んでくれ」

そう言い残し飛び立った。

シオンは何時の間にか静けさを取り戻している空を見つめていた。

アイナの口から「んっうん、あっ」と可愛らしい吐息が漏れるとゆっくりと目蓋を持ち上げた。

「気が付いたか？」

「シ……オン？ ごめんですう」

俯いたままアイナの口からは目を覚ますなり謝罪の言葉が口を吐いた。

「なに謝ってたんだ？」

アイナは黙っていたが、シオン以外の男に肌を曝してしまった事を謝ったのだ。

「悪かったな。もっと早く助けてやれなくて。その……ひ、酷い事されなかったか？」

シオンは頬を指で掻きながら尋ねるとアイナは、こくりと頷きシオンの胸に飛び込むと両手でシオンに抱いた。

「おばかあシオン！ 怖かったです——、もっと早く助けにきやがれですう」

アイナの目から安堵の涙が零れ落ちた。

「悪かったな」

シオンがアイナの身体を抱きしめ返した。

「？」

シオンがこれまでアイナを抱きしめた時とは違う感覚に気付く。

アイナは衣服を切り裂かれている。

シオンの胸に飛び込んだ際、シオンが掛けたローブは肌蹴っていて今は下着だけの素肌だった。

柔らかく、すべすべするアイナの肌を直に腕に感じる。

その感触を複雑な心境で、暫し楽しむ様に抱きしめているとアイナは怒る素振りも無く言った。

「シオン？ 何だか手の動きが……えっちいですう」
「か、帰るか」

シオンが誤魔化す様に言うとペガサスを呼んだ。

ペガサスにシオンが先に跨るとアイナに向け微笑み掛けた。

「さあ帰りますよ。お姫様」

以前アイナが、ペガサスに憧れる理由を散々聞かされていたシオン。

アイナは何処か恥かしそうにしていたが、その事をシオンが覚えてくれた事がなんとなく嬉しかった。

シオンがアイナをペガサスの上に引き上げてやるとペガサスをギルドに向ける。

アイナがポツリと口を開いた。

「シオンの抱きしめ方……えっちいですう」

恥かしそうに顔を赤らめ、ぷいっと顔を逸らす。

「そ、そうか？ 落ちると大変だからなあ……お前の夢一つ叶えてやったんだ。変な言い方するな」

シオンが顔を赤くして言った。

（我ながら恥かしい事してしまった）

「ありがとですう……王子様あ」

照れくさそうにシオンに顔を近づける。

「お、王子様は眠りの魔法で眠っているお姫様に口付けをして起きますのですうよ？」

——何だか話が違う様な気もする。

（起きてるし……まっ乗り掛った船だしな）

「はい、はい、お姫様。仰せの通りに」

シオンはアイナの唇に自分のそれを近づけた。

ラナ・ラウルの夜空は、二人を何処までもやさしく見守っていた。

†人形使いとゴーレムナイト† 漆黒の守護者 End

ゝ 漆黒の守護者 〵 第十六話（終幕話）（後書き）

最後まで読んで下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―）

†人形使いとゴーレムナイト†3 終幕です。

次回！！ †人形使いとゴーレムナイト†4（更新未定）

ゝ 混沌への前奏曲 〵 お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1476g/>

†人形使いとゴーレムナイト† ~ 漆黒の守護者 ~

2011年8月13日12時54分発行